七　乾隆帝と西洋文化

一　乾隆帝と天主教

一　第一次迫害

一七三五年、乾隆帝が位に即くや、この新帝は即時大赦を命じ、前帝時代に叛逆の理由によってあるいは黜陟を被り、あるいは流刑に処せられ、あるいは禁錮されていた親王と重臣とを釈放したのである。

雍正帝時代に長春園〔暢春園〕に監禁されていた允禟とその子ポキーも解放された。(補注三)さらに雍正帝によって西寧に流謫されていた蘇努老父とその家族も釈放された。(補注四)

北京在住の宣教師は新帝の大赦令発布に接して、歓びを禁ずることが出来なかった。蘇努はもちろんのこと、恩赦に浴した皇子の中には、宣教師と親交があり天主教の擁護者が多かったから、この大赦を施した新帝の心理を分析して、天主教にたいする新天子の好意を認めたのであった。それゆえ、宣教師は、雍正帝時代にあれほど圧迫されていた天主教も、乾隆帝の恩典に浴して、康熙帝時代の盛況を復興することが出来ると期待していた。しかし宣教師の眼前には二つの困難が横たわっていた。まず天主教の禁令は雍正帝の発布にかかるものであるから、乾隆帝は子として、父帝の禁令を撤回し、もしくはこの禁令を無効に帰せしめる解釈法を発見すべき方法のないこと、次に宣教師が新天子に親近し、あるいは上書を捧呈すべき機会と方法のないことであった。けれども禁令撤回のためには万策

を尽そうと決心していた。

当時の首相、馬斉はかねてから宣教師に好意を示し、ことにフランス耶蘇会士パールナンとは三十六年来、親交を続けていた。ゆえにパールナンはこの宰相を訪ねて、禁教令撤廃の件を相談した。すると馬斉はパールナンに上奏文を捧呈せよと勧めた。それでパールナンはこの勧告に従って、この大官の手許に上表を差出した。馬斉は礼部尚書兼宗人府の長官であった女婿に託して、(補注五)宣教師の上書を乾隆帝の御手許に通達すべきことを誓った。この礼部尚書が輔政の允録に面会して、宣教師の上書捧呈の件を話し、その意見を徴すると、意外にも允録は反対した。かくて上書捧呈の件は停頓状態に陥った。宣教師の希望はもろくも破壊されたのであった。

しかるに乾隆元年四月一日、乾隆帝は天主教徒にたいする告訴状を決裁されたのである。かくて第一次迫害が発生した。

その原因は次の通りである。

ある官庁の下級官吏が雍正帝によって流刑に処せられていたが、乾隆帝の大赦に浴して北京に帰ることが出来たので、祝宴を催そうと考えた。それで妹をこの祝宴に招待した。

この妹は天主教徒であり、同信の官吏と結婚していた。それで兄の催すべき祝宴が迷信的色彩に富んでいることを恐れて、臨席を拒んだのであった。両家はもとより仲の好い方ではなかったから、妹の拒絶に接すると、兄は妹の薄情を怨んだ。そもそも妹が、かほど情誼を欠くのも、畢竟、天主教を信ずるからであると兄は判断し、罪を天主教に嫁した。その結果、訴状を陛下に捧呈したのである。

訴状の内容はきわめて陳腐に属していたのだが、ただ「漢人は満洲人とは同じ起源に属さずといえども、陛下は満漢の区別を立てず同じ温情をもって両族を遇し給う。ゆえに同じ禁令が満洲人にも漢人にも適用されざるべからず。しかしてこの異教を信奉する者は等しく罰せざるべからざるなり。か

かる厳格なる態度をもってせば、我が国法は遵守せらるべく、したがって国家のために憂うべき悪果は毫も発生せざるべし」という文句が開陳されていた。この訴状は満洲旗人の中に天主教を信ずるものがいること、その信仰が政府によって看過されていること、ことに満洲旗人の天主教信仰は国家に災害を来すべきことを暗示していた。

ゆえに政府はこの訴状を受理して会議にかけ、即時、左の決論に到達した。

㈠ 天主教に改宗したものを調査し、彼等に棄教を勧告し、この勧告に応じないものは厳罰に処すべきこと、㈡ 科学、ことに天文学に通暁するがゆえに北京に残住する宣教師が漢人および満洲旗人を天主教に誘導することを禁止すべきことであった。そして四月二十七日、禁令の公布をみたのである。

禁令が公布されるや官吏に迫害を命じたので、警察官はいたる所から信徒を拘引し、血みどろの迫害を加えた。そして彼等は、信徒の口から棄教の言葉がたちどころに発するものと期待していた。しかし結果は意外であった。天主教徒は迫害を耐え忍んで、教法のために殉ずることが宿願であると答えた。

北京在住の宣教師は乾隆帝の禁教令に接し、かつ激烈な迫害の発生をみると、どうかして窮況打開の道を拓こうと考えた。乾隆帝は天主教に縁故のふかい前代の囚人を釈放されたし、在朝の宣教師には破格の恩待を賜わっている。ゆえに天主教にたいする禁令強化は新皇帝の本意ではない。官吏の邪心に出ずるのである。したがって乾隆帝に事情を直訴すれば、帝は禁令の撤回を命ぜられるにちがいない。そうすれば迫害は必然、鎮圧されるのである。しかし直訴は宮廷の慣例と背馳している。それに玉体に近づく機会がない。宣教師はふとお気に入りの画僧カスチリョーネのことを思い出した。彼等はこの宣教師に託して、直訴の非常手段をとることに決議したのである。

一七三六年五月三日、乾隆帝はカスチリョーネの画技を御覧になろうとして、彼のそばに玉歩をはこばれた。カスチリョーネは筆をおいて、顔面に悲痛の色を浮かべながら、帝の足下に跪いた。そして天主教禁止の件について悲嘆の言葉を申上げてから、懐中から黄絹に包んだ上書を取り出した。乾隆帝はカスチリョーネの言葉を聴かれたあとで、

「朕は一概に天主教を禁じたのではない。ただ満洲旗人がこの異教を信仰することだけを禁じたのである」と宣われ、おそばの宦官をしてカスチリョーネの上書を受領せしめられた。それからカスチリョーネの方を振り向かれて、

「朕は上書を読むであろう。安心して画技を続けよ」と優諚を賜わった。

その後十日を経て、宮内府の一長官であり、宣教師の事務を管掌する海望が、宣教師の代表者を呼び出して、皇帝がカスチリョーネの上書を会議に提出されなかったことを告げて、

「一般の満洲人と満洲旗人とが天主教を信ずることは不都合である。政府は、天主教を禁止しない。天主教が偽りであり悪いものとは主張しない。宣教師が天主教を伝道することは、その自由にまかせる」と述べた。

しかし、海望の言葉こそ偽りであった。宣教師は都察院の張出した布告の写しを海望に示した。その布告には満洲旗人、漢人の区別を問わず、いやしくも天主教を信奉するものはことごとく、裁判に付して厳罰に処すべき旨が明示されていた。

海望はこの布告の写しを見て、困惑の色を浮かべた。そして彼は論点を転じた。

「こういう布告の発せられた以上、禁令を撤回する道はない。事前に運動して、未然に防ぐべきである」

宣教師は、当局が宣教師の利益に関することはすべて秘密に付するので、事前に善処する道のない

ことを説いて、今後、かかる事件の発生した時には、海望自身が責任を取らんことを要求した。すると海望は「よろしい」と答えてコソコソ引取った。

宣教師の運動は必ずしも無効に終ったとは言えない。宮中の大官が聖旨を宣教師に伝えたという風聞が拡まったので、官吏の天主教徒を検問するのに手心を加えだした。そして迫害は二月間続いたあとで、ようやく鎮静に帰したのであった。

二　第二次迫害

前述の通り第一次迫害がようやく鎮静して、在朝の宣教師がホッと胸を撫下した時、すなわち翌乾隆二年（一七三七年）第二次迫害が生じた。その原因は次の通りである。

北京では貧民が生児を棄てるので、政府は棄児を集めて、育嬰堂に収容して哺育するが、手当の悪い結果、死ぬものの方が多いのである。

耶蘇会は南堂、北堂、東堂に近い区域を分担して、棄児の救済に努め、生児には洗礼を施していた。その数は毎年、二千を越えたと言われている。

或る日、ポルトガル伝道団の宣教師、劉二という中国人が育嬰堂に赴いて洗礼を施していた時、たまたま捕吏に踏み込まれ、〔順天府尹〕の許に検束された。〔順天府尹〕は天主教徒たることは禁令違犯の罪悪なりという理由によって、この事件を刑部に廻付した。

刑部の法官、満洲人ウー・チェ・サンは元来、天主教の反対者であったから、劉二事件が自己の管掌範囲に廻送されてきたことを歓び、まず劉二を拷問にかけて、宣教師が金銭によって中国人を籠絡し、天主教に入信させることを、劉二の口から吐かせようと企んだのである。しかし劉二は拷問にか

けられても、天主教徒ということ以外にはなんらの口供を与えなかった。

当時の刑部尚書もまた天主教の憎悪者であったから、さらに劉二を拷問にかけた。けれどもその結果は、やはり無効であった。たまたま刑部尚書は〔両江〕総督に任命されたので、劉二の吟味は中止された。

劉二事件はある漢人法官の手に渡ったがこの法官は劉二に杖刑一〇〇、一箇月間首枷を嵌め、その後、なお杖刑四〇を受くべしという判決を下した。そして劉二の罪は、呪文を唱えて棄児の頭に水を灌いだということにすぎなかった。

同年陰暦九月二十三日（陽暦十一月十五日）この判決は諸官省に廻送された。劉二は十一月十三日から首枷を嵌めていた。首枷の上には「天主教徒たる罪により」と明記してあった。

ポルトガル伝道団の宣教師は、最後の手段に訴えんとして乾隆帝に捧呈すべき上書を作成し、この上書を海望の内見に供えた。海望は宣教師に命じて不当な辞句を修正せしめた後、この上書を刑部の当局者に明示しても、刑部が態度を改めなければ断然、皇帝に捧呈すべきことを誓った。

宣教師の上書は、㈠経文を唱えて霊水を灌ぐことが、罪悪であり、刑罰を被るべきことは、未だ聞かざること、㈡劉二が、誦経灌水を行ったがゆえに拷問にかけられたこと、㈢彼が杖刑を加えられたのは、天主教を信ずるが故にほかならぬことを述べ、さらに、乾隆帝が登極の際、宣教師に殊遇を給い、先年三月、皇帝は天主教を禁止せざる旨を明言されたことを付記した。しかし刑部は、宣教師の上書を内見したが、決して態度を改めなかった。それどころか刑部は、宣教師が皇帝に上書したことに憤激して、激烈な復答文を闕下に捧呈した。その内容は、㈠劉二の一幼児の頭上に灌いだ水が、魔術と関係あることは、疑いなきこと、㈡拷問は、罪人をして自白せしめる正常の慣習手段なること、㈢劉二は欧人の宣教師にあらず、天主教を信ずる中国人は、中国政府の支配に属すること、㈣国民の

統治に関しては、国法にたいする畏敬の念を鼓吹せんがために、官吏が峻厳な態度をとるとも不当にあらざること、㈤天主教は偽教にして、いやしくも寛弘の態度を示せば、その弊害の恐るべきこと、であった。

乾隆帝はこの復答文を承認された。ゆえに海望は宣教師の代表者を集めて、㈠刑部は前令を遵守したこと、㈡ただ会堂内において天主教の信奉を行う自由を認めること、㈢政府は漢人ことに満洲旗人が天主教を信奉するのを欲せざること、㈣宣教師は平生通り職務を実行すべきことであった。

宣教師代表者のひとりであったパールナンがかなり激越な口調で、康熙帝が天主教の教義を調査せしめ、その純真なることを知り、国民一般にたいして、その信奉を公許したにもかかわらず、今や禁令は布告されて天主教徒は恐しい迫害を被っている。康熙帝が内容を吟味せしめた天主教は、それ以来、内容の変動をみず、天主教書類の価値は少しも変らない。

それにもかかわらず、政府は教徒を捕えて投獄し、さらに彼等をして棄教せしめんがために布告を張り出している。かくの如く政策に矛盾があるばかりでなく、政府は宣教師にたいして「職務を続行せよ」と命じている。もし天主教徒たることが罪悪であるならば、宣教伝道する者もまた国罪を犯すものと言わなければならない。しかるに政府は宣教師にたいして「職務を続行せよ」という。これもまた矛盾撞着といわなければならない。

さらにパールナンは、中国から追われてはノメノメと帰国しがたき事情を述べ、ついに進退谷まったために、直接、袞竜の袖に縋るよりほかに道なきことを述べた。

ついに翌日、乾隆帝がカスチリョーネの画技を御覧のため、宮中の一室に出御された。そして画事について御下問があった。しかしカスチリョーネは意気銷沈して、御返事申上げるだけの元気もなかった。

乾隆帝はカスチリョーネが病気ではないかと気遣われて、その様子を問われたが、この画僧は「いな」と答え、禁教令発布のため悲痛に打たれて元気を失ったと答え、もはや平然として御用をつとめ難きにいたったことを申上げ、

「ヨーロッパで禁教令発布のことを知りましたら、陛下に奉仕して中国に参りたいと思うものは一人もございません」と付言した。

「朕はそち達にたいして、天主教を禁止したのではない。そち達が天主教を奉ずるのは自由である。しかし我が国民は天主教を信じてはならない」と乾隆帝は答えられた。

カスチリョーネは、宣教師は中国民にたいして伝道せんがために中国に渡来したこと、また康熙帝が、天主教の公許令を中国全土に公布されたことを申上げた。彼の目には涙がいっぱい溜っていた。乾隆帝はカスチリョーネに深く同情されて、事件を再吟味すると答えられた。けれども乾隆帝は北京在住の宣教師にたいしては、きわめて好意的な態度を示されたが、刑部にたいしては禁教強化の対策を承認されていた。翌年一月、刑部は禁教令を諸省に向かって公布した。しかしパールナンがこのたびの禁教事件に関する経過を小冊子に印刷して、北京をはじめ津々浦々にいたるまで配布した。そして北京ではようやく迫害が鎮まったが、地方ではかえって盛んになりだした。刑部の禁教令に接すると、地方の官憲は天主教徒の検挙に着手し、家内を捜索して信徒を検束した。宣教師もまた酷い迫害を被った。彼等は遠い地方から、迫害事情を北京の宣教師に通信したり、あるいは捕吏に追われ変装して北京に落ちのびたりした。

そのうちに地方の迫害も、何時か鎮静したのであった。

三　第三次迫害

雍正帝の時代に福建省福寧州福安県に迫害事件が発生して、この事件が禁教の動機となったことは前述の通りである。乾隆十一年（一七四六年）にいたると、また福建省に迫害が生じた。

福建省に渡来した宣教師は、北京そのほか諸省に在住する宣教師とは違って、耶蘇会に所属せずドミニコ会に所属していた。それゆえ、北京政府は一種の疑惑をもってドミニコ会宣教師の言動を眺めだしたのである。ことにこれらの宣教師が天主教に入信した中国人の正確な姓名表を作成して、これをヨーロッパに送り、一朝、東洋とことある時、ヨーロッパの諸王は中国の天主教徒を自国のために利用すべし、という風聞が北京政府の耳に達したので、中央政府はいっそう監視を怠らなかった。

たまたま六月、ある儒者が、福安市およびその付近に住居する天主教徒を巡撫にたいして告発した。巡撫は樊という警察官を派遣して、事情を調査せしめた。樊は天主教一味を探索して事情の究明につとめ、ただちに帰って巡撫に事情を復命した。同時に福安市から巡撫の手許に報告書が送られてきた。いま樊の復命報告と福安市の報告書との内容を要約すれば、左の九条に帰着するのである。

㈠天主教の宣教師は皇帝の禁令を犯して布教に従事する潜伏者なること、㈡宣教師は天主教に入信せんとする中国人にそれぞれ二エギュ与え、また地獄極楽の苦楽を説いて勧信すること、㈢同信中からもっとも篤信的であり、信礼を遵守する者を選んで布教師に任じ、信徒五十名を統率せしめること、㈣信徒は祖先も孔子も尊崇せずに、耶蘇と呼ぶ異邦人にいっさいの尊敬を捧げていること、㈤宣教師は一年に二回懺悔の慣例を同信間に設けたこと、㈥天主教を信ずる女子は、娘も妻も絹服を廃し、花や宝石を髪に飾るのを厭うこと、㈦信女の間には一生、結婚を欲せざる者のあること、㈧少数の信徒の家には宣教師を隠匿するに適当な二重壁の隠れ場が設けてあること、㈨宣教師は特別建築の大会堂

内に男女の信徒を集め、ある種の食物と酒とを供し、彼等の肉体に油を塗ること、であった。

巡撫はこの報告に接するや即時、樊を福安市に送って、宣教師と信徒とを検束した。ドミニコ会の宣教師スペイン人、ピエール司教〔名義司教、福建代牧〕(Pierre-Martyre, évêque de Manricastre)、ロヨー(Royo)、アルコベール(Alcober)、セラノイ(Serranoi)、ヂャーズ(Diaz)の諸師であった。(補注三)

裁判官は宣教師と信者信女一同を法廷に呼び出して訊問を始めた。裁判官の頭を支配していた疑問は、信女が一生童貞を守るという件であった。ゆえに裁判官はある信女にたいして、童貞を守らんとする意志は宣教師の強制によるかと尋ねると、彼女は自由意志によると答えた。さらに裁判官は宣教師の肉慾に奉仕せんがために童貞を守ると自称するのではないかと尋ねると、この信女は法官がかかる汚らわしい邪推を懐くのは宣教師の徳性を知らざるによると言下に答えた。裁判官はこの信女に拷問を加えたが、彼女は一生、童貞を守り処女として死ぬべき念願を口走るにすぎなかった。

裁判官や樊はそれぞれ宣教師と信徒とを訊問したが、なんら得る所はなかった。七月十日宣教師と信徒とは、両手と両足とを鉄鎖にくくられ護送車に乗せられ、福建省の首府、福州へ廻送された。福州の巡撫は宣教師と信徒との到着を待ちかねていたから、夕刻にもかかわらず法廷を開いて被告を訊問しだした。

ピエール司教は、ローマ教皇の命によって中国に渡来し、かつ一身を養うにたるだけ給与を受けているにせよ、金銭によって中国人を入信せしめるというのはまったく虚構の事実であると答えた。すべて洗礼は信者の懇請に出ずるがゆえに、これを授けるにすぎず、中国人が宣教師の法話を聴いて天主教に帰信したい願いの生ずるのは、この宗教の優越性に基づくと主張した。それどころか司祭は、天主教徒は天上の福楽を味うに反し、天主教を否認するものは、地獄に堕ちて永劫の苛責に苦しむことを述べ、この世の富貴権勢に富む人たとえば巡撫の如き人物も地獄の苦しみを免がれずと説いた。

巡撫は、これを聞くや激怒し、ただちに部下に命じて、二十五回の頬打をピエール司教に加えしめた。警察官の樊は、宣教師が信女の貞操を蹂躙したこと、また魔法を用いたことを予審調書に書き上げておいた。かかる中傷の原因は宣教師の衣服から薬剤が発見され、またアルコベール師が骨壺を預けておいた信者の家からこの壺が発見されたからであった。しかるに樊は、宣教師が幼児を殺し、その頭蓋から媚薬を作り出して、信女の貞操蹂躙のためにこの媚薬を利用したと主張し、かつヨーロッパのある秘薬は避妊に特効があることをも付記したのであった。もちろん、宣教師は即座にこの訊問を否定し、この遺骨は兇賊の手にかかった同僚のものであり、故人の祖国に送り還す機会がなかったので、信者の家に預けおいたにすぎないと弁解し、貞操蹂躙の件については、その内容があまりに馬鹿馬鹿しいので答弁の必要がないと答えた。

宣教師が幼児を殺したという嫌疑は、発見された人骨がはたして幼児のものなりや否やという点に解決の鍵があったから、法官は郊外に出張して問題の人骨を臨検した。人骨はほとんど粉末状態にあったが、中国人の専門家は大人の骨であると断定した。樊は、人骨が粉末状態にあるからこそ、幼児の骨たる証拠であると主張して一歩も譲らなかった。幸い椎骨の関節が残っていたので、その長さによって大人の骨なることが証明された。

かくて樊の主張は一蹴されたのである。しかし彼は自己の非議を顧ず、かえって法官を怨んで、彼等に復讐しようと謀った。それですぐさま巡撫のもとに赴いて、福安県の法官は宣教師によって買収されたと訴えた。この告訴にはなんらの証拠が無いにもかかわらず、巡撫は法官の調査報告を破毀した。そして今までの法官に解職を命じて、他の県令を新しい法官に任じた。

新しい法官は宣教師と信者、信女の取調べを開始し、あるいは頬打、棒打を加え、あるいは拷問にかけて、口供を得ようとしたが、被告は毫もひるまなかった。彼等はかえって殉教の血を流す歓喜を

味わっていた。

法官は巡撫の督促により、被告にたいする訊問を再開し、宣教師の多数と二、三名の信者を流刑に処し、他の信者と信女とを軽罪に処すべき判決を作成した。そして彼等は、宣教師の罪状を次の如く列挙した。

㈠雍正帝の禁令および乾隆帝の禁教令から処断すれば、ピエール司教その他の宣教師はみな潜伏者たること、㈡彼等は会堂を立て、堂中でひそかに説教し、信者の額に油を塗り、特別のパンと酒とを信者に振舞うこと、㈢彼等は信者に命じて祖先の位牌を焼かしめ、祖先教を放棄せしめ、上長者と両親とに対する正常な服従を否認せしめること、㈣信者の頑迷不霊にいたっては、死をもってするも彼等の決心を変えがたいこと、㈤宣教師は死後、霊魂の昇天することを唱えるがゆえに、信者は、かほどまで頑迷に陥りしこと、㈥宣教師は多数の信者と信女とを会合させること、㈦この会合の際、宣教師は金銭を会衆に分配するから、多数の貧民が集会すること、㈧天主教に入信した娘達は童貞女と呼ばれて、一生独身で暮らすこと、㈨ピエール司教と宣教師とは毎年、帰信者の目録を作成して、ひそかにマカオ澳門に送り、この目録は澳門からマニラに送られ、ついでマニラからローマ教皇の許に送られること、㈩宣教師は人心を荼毒するに妙を得ているから、彼等を信頼するものが多く、役人や兵士の中にも彼等を尊崇するものが少くないこと、(十一)彼等が縛に就いて護送される途中、彼等の護送車の轅に縋りついて同情の涙を流すものが多く、妻と娘とは跪いて彼等に飲み物を捧げたこと、(十二)ある儒生が「諸君の苦しいのは神のためである。死といえども、諸君の心を動かすこと能わず」と群集の先頭に立って叫んだこと、(十三)宣教師は法名を信者に授け、その法名目録を本国に送って不軌の陰謀を企てることは何人も否定しがたいこと、(十四)ゆえに天主教を根絶せんがためにピエール司教に斬首刑、その他の宣教師に絞首刑を宣告したこと、であった。

この判決書が北京政府に向かって発送中、乾隆帝は諸省の総督にたいして、宣教師と天主教徒とを探索せよという秘密命令を発した。その結果、全国にわたって恐るべき迫害が発生した。

北京在朝の宣教師は、全国的な迫害情報に接するや、彼等自身も北京から放逐される公算が濃厚になったから、彼等は例の如く乾隆帝に直訴して、その憐憫を求めようとした。これまで迫害の起る度ごとに、御気に入りのカスチリョーネ師に託して上書を捧呈せしめたが、元来、直訴手段は異例に属するので、かえって当局の不快を招き、ことの成功を妨げた。それゆえ、このたびは上書を捧呈せず、ただ口頭によって事情を帝意に訴えることに決議した。

たまたま乾隆帝は御筆の素描に関して、カスチリョーネ師の意見を求めようと考えられ、この画僧を呼び出された。カスチリョーネ師は、御用がすむとすぐさま跪いて、

「陛下、天主教の惨状に関して御憐憫をお願い申上げます」と奏上した。

乾隆帝は、

「そち達は外国人である。我が国の風習には通じていない。こういう場合には、そち達を保護するよう二人の大官に命じておいた」と言われた。

この勅諚により宣教師は、二大臣に援助を求めなければならなかった。そして彼等は比較的勢力のあった大臣の方に願書を捧げた。そしてこの大臣と会見したが、ほとんど要領を得なかった。

乾隆帝は五台山に行幸されていたから、宣教師は皇帝に直願すべき機会を持たなかった。

ほどなく還御されたので、彼等はまたもやカスチリョーネ師に託して、彼等の念願を帝意に訴えたのである。

当日、乾隆帝の方からカスチリョーネ師のそばに玉歩をはこばれ、シャリエ師の病状を質問された。カスチリョーネ師はほとんど回復の見込なきことを奉答した。すると皇帝は、

「西洋の医者が二、三名、北京におらぬか」と聞かれた。

「おりません」

「それはなぜか」

「これほど遠い所へ来てもらうのがむずかしいからでございます。でも上手な外科医が二人おります」

「外科の取扱う病気は外面的なものであるから、外科に長ずることは易しい。だが、そち達は病人のために神に禱るかね。病人を癒して下さいと神様に禱るのか」

「はい、陛下、神に禱っております」

「それではどうして願いが叶わないのか」

「神は全能にましまします。願いを叶えて下さることも出来ます。また願いを叶えない方が好いと思召すこともございます。我々は何時でも神の御意志に任せております」

すると乾隆帝は、

「もう一つ訊きたいことがある。天主教徒は死を恐れているか」と訊かれた。

「正しい生活をいたした者は死を恐れてはおりません。不正な生活をいたした者は大そう死を恐れております」

「しからばどうして正、不正の生活をいたしたと知ることが出来るか」

「良心の証明によって生活の正邪を知ることが出来ます」

こういう珍しい会話のあとで、乾隆帝は同座していた中国人の画家に向かってこう訊かれた。

「ありていに申せ。そちはズッと以前から宣教師と交際しているのを見うけるが、天主教に帰依いたしたか」

その画家は、中国人は天主教徒にあらざること、自分には入信の意志が毛頭ないこと、フランス宣教師ド・マイヤから入信を勧められたが、「キリストの化身」という点が会得できないので、帰信できなかった事情を言上した。この言葉を聞くと、カスチリョーネは口を挟んで、この神秘が説明しうると主張した。

「それではどう説明できるか」と乾隆帝が尋ねられた。

「神は全能の力によって、処女の胎内に一個の肉体をお作りになりました。そしてこの肉体に霊魂を結合されました。神はこの肉体と霊魂とを自己の神性に帰一されたのであります。それは罪に陥った人類を地獄から贖うためであります。私は自分の説明いたしたことをスッカリ明白に説明することが出来ません。しかしこの神秘は宗教書の中でハッキリ説明されております」とカスチリョーネ師が言い添えた。

すると乾隆帝は嘲笑を漏らされ、中国人の画家に向かって、

「そなたは西洋の宗教書が読めないから、天主教信者にならなかったのである」と言われた。するとカスチリョーネ師は傍から口を出して、

「陛下、失礼ではございますが、漢訳の宗教書類がございます。その中に化身の神秘が説明されております」

と申上げた。そのとき皇帝は、

「余計なことを申すな」と不機嫌な調子で言われた。

乾隆帝とカスチリョーネとがこういう会話を交換されていた時には、福建省巡撫の判決書が北京政府に到着していた。この巡撫は河道総督に昇進したので、中央政府に出頭して手柄顔に、福建省における天主教迫害の事情を政府に報告したのであった。

北京の宣教師は、乾隆帝がシャリエの病床に侍医頭を差向けられたことから考えて、皇帝は福建省で発見された潜伏者をヨーロッパに追放されるだけで、他の宣教師には寛大な処置をとられることと期待していた。しかるに今回の事件に関しては、皇帝の態度が硬化していた。そして福建巡撫の判決が刑部に送られると、刑部はもちろんこれを証認し、皇帝自身も允許されたのであった。一七四七年四月十八日、刑部は次の布告を発した。

「邪説をもって国民を誘惑せるピエール司教および他の宣教師の訴訟に関する福建省巡撫の判決に応じて、刑部は皇帝の命令に接したる後、左の処刑を宣告す。

即時ピエール司教を打首に処すべきこと、高にたいする判決を彼を認めて、絞首刑に処すべきこと、これ等の四名は晩秋まで禁錮し、その後、刑を執行すべきこと、他の余類にたいする官吏の判決を承認す」

ピエール司教は一七四七年三月二十六日、打首の刑に処せられた。他の四名の宣教師は信者の高とともに、翌年十月二十八日、処刑された。

参考文献

Lettre du P. Parennin au P. du Halde. A Pékin, le 22 octobre 1736.

Etat de la religion dans l'empire de la Chine en l'année 1738.

Relation d'une persécution générale qui s'est élevée contre la religion chrétienne en 1740.

Lettre d'un missionnaire de Pékin en 1750 à M…A Pékin, 1751.

Favier, Péking.

Huc, Le christianisme en Chine. t. VI.

A. Thomas, Histoire de la mission de Pékin. Paris, 1923.

「正教奉褒」

補注

二九　ここは後藤博士に誤解があるようである。パランナンの書簡によれば、この釈放された康熙帝の皇子は、雍正帝と母を同じくする第十四皇子であったという。そうならば当然青海平定の大功を立てた允禵でなければならない。またかれが収容監禁されていた Tchang chun yuen は康熙帝の別荘の所在地である暢春園とすべきであろう。允禵が釈放されたのは一七三六年一月十七日で、乾隆帝の命を受けて康熙帝の第十二皇子である允祹が出かけていって厚い壁をめぐらされた獄からかれを救出したということである。なお同日に康熙帝の第十皇子である允禟も釈放された。

三〇　蘇努が乾隆帝の大赦によって釈放されたというのは誤りで、かれは一七二五年一月十二日、配所である右衛（山西省右玉県）から二里（リュー）ばかり離れた野原の真中にある新堡子という小部落で死亡した。宗室の一員だというので、雍正帝は葬儀のために下賜する費用、儀式に参加させる人員を指示した。当時外征していた第四子、第六子、第十二子を父の喪に服させるために新堡子に呼ぶことを命じた。一方右衛に高官を派遣して、蘇努の子孫から黄帯子を奪わせた。一七二六年、第二子、第四子、第九子、第十子、第十三子、第一子の長男の六人は地方諸省に分置監禁された。一七二七年、第十二子は棄教を肯じなかったので北京で重監禁され、同年第三子、第十一子も同じ理由で北京に送られ、狭い牢獄につながれた。第十二子はこの年に獄死した。第六子も北京で永久監禁を言い渡された。第二子、第十子はそれぞれ済南府、南京の獄舎で死し、第三子も一七二七年に北京で死亡した。雍正帝晩年の一七三三年、地方に配流されている蘇努の子孫たちを右衛に戻せという命が下った。やがてかれらは右衛に戻り、鎖を外され、髭をそることも許された。ついで各人はそれぞれの家族ごとに右衛内の八旗に分属させられた。以上のようにすでに雍正の末年に蘇努の子孫にはやわらかな処置が加えられていたのであるが、乾隆帝は一七三六年三月二十七日、蘇努の子孫たちに紅帯子を許し、一度かれらの名を削った玉牒（皇室系譜）に再び記入することを命じた。なお黄帯子と紅帯子についてパランナンはつぎのように記している。「これ（黄帯子）は王朝の始祖の子孫

や、始祖を助けて国家を平定したその兄弟たちの子孫だけに許される名誉のしるしです。貝勒が選ばれるのはこの連中のなかからだけです。なお昔は同一族に属し、覚羅の姓をやはりもってはいるけれども、王朝の始祖の子孫でも、またその兄弟たちの子孫でもないものはとくに紅帯子を許されます。かれらは役人になることはできますが、貝勒になることはできません」

三一　パランナンの伝えるところによれば、この女婿というのは康熙帝の第十二子である允祹である。「この第十二皇子はこの大臣（馬齊）の婿であって、大臣にたいして特別の敬意をいだいています。皇帝は大臣の兄弟の娘、すなわちその姪と結婚しているのでありますが、やはりかれの婿ということになっています」

三二　乾隆十一年の福建省における天主教迫害については、後藤博士の拠っておられる Lettres édifiantes et curieuses 所収の報告のほかに西洋側にも多くの資料があるが、わたしは最近ヨーロッパ各地の文書館においてかなり大量の漢文史料を発見した。まだ整理中でその成果を公けにすることができないでいるけれども、これらの史料ではピエール・サンス福建代牧は白多禄と書かれ、他の四宣教師はそれぞれ、葉敬、徳黄正国、施黄正国、費若用といった文字で表わされている。かれらの詳細な供述書、所持品目録などが残っている。なおこの弾圧を行った福建巡撫は周学健で、閩浙総督は馬爾泰である。熱心な信者で、後藤博士が高と記しておられるものは、郭恵人、郭近人のいずれかを指すものらしいが、郭恵人の方をとるべきであろう。

二　乾隆帝の西洋趣味

一　円明園内に洋館と噴水の構築

円明園は北京の西直門外、皇城の西北二公里の地にあり、暢春園、長春園、万春園をはじめいくたの属園を含み、今日の万寿山離宮も、円明園の一部だったのである。

円明園本園は周囲二公里、フランス耶蘇会士アッチレの記述によれば、円明園の広さはフランスのヂジョン市（Ville de Dijon）の広さに匹敵するという。このヂジョン市は元ブルタニュー州の首府であり、現在では六万ないし七万の人口を有し、広さ一六三、九六六エクターに及ぶのである。

康熙帝はこの円明園を雍親王すなわち後の雍正帝に下賜されたものであったが、乾隆帝はその風光を愛し、天下の善美を尽して大増築を加えられたのであった。この離宮の由来と景趣については、雍正帝の「円明園前記」、乾隆帝の「円明園後記」の中に詳述されている。外国の文献としてはアッチレの通信（Lettre du Frère Attiret, peintre au service de l'empereur de la Chine à M. d'Assaut, le novembre 1743.）がもっともこの離宮の景観を叙して余蘊がない。事実、中国の文献中にも、アッチレの通信ほど詳細をきわめるものはないのである。

宣教師の通信によると、乾隆帝は円明園を避暑離宮とされたが、帝はその風光を愛し、ほとんど四季を通じてこの離宮に滞在され、祭祀の日にのみ皇城に還御されたのであった。実際、乾隆帝は皇城に約三月居住されるだけで、他は円明園で万機を親裁されていた。

この離宮には古代の珍宝が収蔵されていたばかりでなく、西洋君主から献進されたり、耶蘇会士の進呈したりした名器佳什が集まっていたのである。実際、円明園はその宏壮な結構から見て、西のヴェルサイユ宮と併称せらるべき宮殿であったと同時に、その蒐集品から見ても、世界第一の宝庫であった。

しかるに咸豊十年（一八六〇年）英仏連合軍は円明園に侵入して、その財宝を掠奪し、しかもその迹を覆わんがために、この離宮を焼き払ったのであった。中国軍が英仏捕虜を惨殺したことが白人軍の激怒を買ったにちがいない。それにしても円明園が忽然、地上から姿を没却したことは、たんに中国の大損失、東洋の大損害にとどまらず、世界人類の大損害と言わなければならない。

フランス耶蘇会士は北京の近郊、海甸に別堂を有し、この別堂から円明園の如意館に出仕していた。如意館は円明園の正門を入って右側の隅に立っていて、中国の画家、象牙工、宝石工が宣教師の画家、時計師、器械師と一緒に働いていたのである。

一七四七年（乾隆十二年）乾隆帝は、たまたま西欧噴水の図を御覧になり、新鮮な好奇心を感ぜられた。それでお気に入りの耶蘇会士カスチリョーネを呼びだし、噴水の説明を求められた。その説明を聴くと、帝の西洋趣味がますます刺戟され、在廷の宣教師中にも、これと同じ噴水を製作しうるものがありやと御下問になった。しかしカスチリョーネは慎重な人物であったから、肯定的な御返辞をすれば、異国趣味の旺盛な帝のことゆえ、どういう結果になるか、たいてい予想がついていたので、まず即答を避けたのであった。それでとりあえず、北京の会堂を歴訪して、同僚と相談の結果、御復答申上ぐべき次第を奏上したのである。しかるに皇帝は御座所にお引取りになるや否や、宦官をカスチリョーネの許に遣わされて、噴水を製作しうべき宣教師を明日同伴して参内せよと命ぜられた。この言葉は事情の如何を問わず、絶対に適任者を推挙せよという厳命と同じであった。どの宣教師も皇帝の御下命が絶対なものであることは疾くに承知していたから、十目の見る所、十指の指さす所に従って、フランス耶蘇会士ブノワが推薦されたのである。

ブノワは適任者として拝謁を賜わった。その時、彼は洋籍を渉猟し、また中国の工人と協力して、この難事業を達成すべきことを奉答した。乾隆帝はブノワの決意を聞召してすこぶる御満足におぼされ、親しく優諚を賜わった。そして勅命によって、中国の工人をブノワの命令通りに服役させることを約された。

ブノワは本国で修道のかたわら天文数学を修め、物理学の一部をも研究し、ときには水力器械を創案したこともあった。彼は中国で迫害が激しいと聞くと、中国伝道に一身を委ねて殉教の光栄を贏ち

えたかった。この希望は長老から容れられて、彼は一七四四年（乾隆九年）澳門に到着した。そして地方の布教に従事したい志望を当局に申出ると、当局は彼の科学素養を重視し、天文学者として同年、北京の朝廷にこの伝道志望者を送ったのである。

乾隆帝から噴水の構築を命ぜられると、ブノワは天文学者から泉水学者に急変した。昔、本国で考案した水力器械の知識が、中国皇帝のお役に立とうとは夢にも考えていなかった。天主教発展のためには天文学、物理学の差別はない。物理学の知識を応用して首尾よく噴水を製作しよう。ブノワはただ、乾隆帝の御感を博して、いささかなりとも天主教弘通の道を拓けば満足したのである。

ブノワはまず噴水の模型図を作って天覧に供した。乾隆帝はこの図を御覧になるとたいそう御満足になり、これを御座所に運ばしめてユックリ御検覧を賜わった。皇帝は、中国式宮殿の前に西洋式の噴水を設置したとて、景致を添えるどころか、風致を害するかも知れないから、洋館と併せて噴水を敷設しなければならないと考えられて、洋館（西洋楼）建築の決心を堅め、親しく円明園の層園、長春園の北路にその地所を選定された。[初注三]そしてカスチリョーネをお呼びだしになり、ブノワと協力して洋館の設計図を作成せよと仰せ出された。かくてカスチリョーネが洋館の設計を担任し、ブノワが噴水の構築に専念したのである。

中国の如き科学文明の発達しない国家にあって、深遠な水力学を応用して噴水を設置する技術上の苦心や、また頑迷無智な中国人を監督して工事を進捗せしめる煩労にいたっては、ここに記述する必要をみないであろう。

ブノワから見れば、本国でいっぺん水力器械を工夫したことはあったが、それ以来研究したことはなかったし、実地に応用したことは全然なかったのである。その上水力器械は雑多な小器械から成り立ち、その組合せは実に複雑微妙をきわめている。またいろいろな形や大きさのポンプ管や導管を鋳

造しなければならない。それにはとうてい、想像出来ないほど寸法の正確を期さなければならない。いまブノワが苦心を重ねれば、天賦の知能と才能とによって、この種の困難は結局克服することが出来よう。しかし彼をもっとも苦しい立場に陥れた困難むしろ障害は、朝廷がこの種の新規事業に反対の態度を示すことであった。元来、朝廷には迷信が充満していたから、廷臣の多数は洋館や噴水を構築すれば、国家の災害を惹き起すに違いないと考えていた。そのくせ何人も皇帝の西洋趣味について諫議を試みるものがなかった。それゆえ、朝廷は迷信的な風聞を流布して、乾隆帝が自発的に洋館と噴水の建設意図を放棄される時機を待っていたのである。ブノワはこの迷信の世界とも戦わなければならなかった。その上彼は工事主脳者として、一種の職権を擁して、国庫を開き、工事を促し、いくたの困難に打ち克つことが出来たかもしれない。しかしこの権力がいささかでも謙遜の範囲を超えるならば、意外の大事を惹き起して、工事そのものに支障を来たす虞があったから、彼は自己の一言一動について周到の注意を払わなければならなかった。また工事を進めるにしても、中国の工人は建築上の術語をまったく知らなかったから、まずこの術語を教えて、彼等を一かどの工人に教育することが必要だったのである。

他方ブノワ自身にたいしてもっとも必要なのは、朝廷の典礼や作法を遵奉することであった。中国の朝廷には虚栄心が充満していると同時に、朝臣は感情よりも利益によって分裂し、中傷と誹謗に長じていると同程度に、礼儀を守り巧言を振り撒くことに達していた。まして閣老は元来、天主教に憎悪を懐いていたから、迫害の動因を求めることに余念がなかった。したがってブノワを取り囲む官人は、たえず水法工事を眺めて、迫害の原因を見いだそうと待機していたのである。

ブノワはこういう窮境に追い込まれて、しかも難事業を敢行しなければならなかった。しかしいっさい神助に信頼していたから、いくたの困難を克服することが出来たのである。彼はまず乾隆帝から

万事一任されたために、かえって独力では何にもいたしかねること、ゆえに本国で実施した設計図に基づき、帝の承認を得て噴水を製作すれば、必ず成功すべきことを乾隆帝に奏進したのであった。この率直な、謙遜深い言葉はたいそう叡慮にかなった。そして帝は、平生、人心の機微に通ずることを自慢されていたから、近臣に向かって「朕は汝等よりも西洋人の性格をよく知っている。彼等は朕をして実行不可能な仕事を企図させない」と満足そうに仰せられた。ブノワはこのお言葉を仄聞して大いに感激し、あくまで不可能事を完成しようと決心したのである。

ついにブノワは工事に着手した。彼が工事に関係する大官や諸侯に説明の労を尽したり、彼等の欲するままに下図を増加したり、模型を作ったりして、能うかぎり彼等の便宜を計り、またこれらの高官にたいすると同じ態度で工人に話しかけていた。周囲の人達はこの様子を見ると、この異教伝道僧にたいして、同情と好意とを感ぜずにはいられなかった。実際こういう感情が一日ましに募ってきた。ブノワは工事の手違いを虞れて工房から工房へ巡視し、親しく作業を監視していた。その態度があくまで謙遜であり、その言葉が肯綮にあたっていたので、工事の関係者は彼の指図に敬服し、彼の承認がなければ一事も専断しなくなった。

いかに皇帝の命令とはいえ、離宮の園内に池を掘ったり、貯水池を設けたりする時には、古来の慣例上、当局の許可を得て多くの監視者や宦官を伴わなければ入園することが許されていなかった。たとい園内に入ることが出来ても、能うかぎり早く退出しなければならなかった。しかし工事が始まってから二、三日たつと、ブノワはこういう煩瑣な、また厳重な規定から脱して、勝手な時に、また単身で入園する恩典に浴したのであった。その上他の宣教師もこの恩典に均霑することが出来た。

乾隆帝は毎日作業場に出御されて、工事の進捗状況を査閲されていた。そして工事関係者に種々の御下問を賜わったが、明答を奏進することの出来る者はブノワよりほかになかった。かようにブノワ

が毎日天顔に咫尺して、御奉答申上げることは、古来の慣例からみて、絶対に許されないことであった。けれども乾隆帝は西夷の伝道僧に破格の栄典を賜わったのであった。それに大臣も諸侯も陛下の特旨を妨げなかった。この一事からみても、いかほど彼等がブノワの誠意に信頼していたか理解されるのである。

宣教師の居住する海甸から円明園までは二里弱の路程であった。ブノワは毎朝海甸から円明園の門前で馬を下り、それから洋館の敷地まで歩行するのであった。その道はいかほど天然の美景に富んでいるにせよ、連日のことでありなお、一日に数回も往復することであったから、ブノワにとっては緑蔭の幽径も、樹間の囀声も、なんらの感興を添えなかった。ことに一里も二里も隔った工房や作業場を巡視して、皇帝の出御を待つために、急遽円明園に引き返さなければならなかった。それで雨の日も、風の日も、炎熱灼くが如き日も、工事を中止することは出来なかった。彼は日が暮れてから海甸に帰りつく時には、極度の過労に心身ともに疲れ果ててしばらくは椅子から身を起すことも出来なかった。そして僧侶の粗飯を取っては、過激な疲労はとうてい恢復しなかった。彼はようやく食卓を離れるや否や、居室に引き籠って計算を吟味したり下図を準備したり、また設計を試験したりしていた。実際、彼は万事試験後でなければ実施しなかったほど、用意周到な人物であった。だからようやく休息を取る時には、もう夜がトップリ更けていた。それで祭日のみが待ち遠しかった。その日は円明園の工事場へ行くには及ばなかったが、北京の会堂に赴いて新しい改宗者に説教したり、近くフランスに留学すべき二青年、高類思と楊徳望とを教育したりしていた。（後章参照）　そして暮色の迫るころ、帰堂したのであった。

ブノワは噴水の構築のために心身を傾倒していたが、決して伝道の本務を忘れてはいなかった。彼は宮中の高官にも、また賤しい工人にも、時間を盗んで天主教の法話を説いたり、あるいは聖書を手

渡して天主教にたいする敬意を刺戟したりしたのであった。また儒教哲学や倫理道徳の知識を鼻にかけている人達を論破しようとして、中国哲学の研究を開始した。それで工事の休憩時間には樹蔭に佇んで漢籍を読んでいた。彼は儒者を相手にして滔々と中国哲学の誤りを指摘し、彼等の心を中国の古典から引き離そうと試みた。ついに彼は「書経」のラテン訳に着手したのであった。

噴水工事は中国の工人にとっては、ぜんぜん新しい仕事であったから、いかにブノワが督励しても工事はなかなか進捗しなかった。しかしその年の晩秋、第一洋館「諧奇趣」の前面に据えた水力器械と第一の噴水が竣工した。池塘、水中の禽獣が口から水を吐きかけて、「禽獣水合戦」の態を現わした。

乾隆帝はこの器械と噴水とを御覧になって、すこぶる御満足の体であった。そして諸侯や大臣の居並ぶ前で、ブノワは成功の見込みない事業を引受くべき人物ではないと明言され、その慎重な人格を称揚されるとともに、かかる人物を起用した先見の明を、彼等の眼前で自慢されたのであった。それに皇帝は噴水の原理をよく理解されていたから、この原理を大官の前でとくとくと説明されていた。

当日、噴水すなわち中国人のいわゆる「水法」の成功は円明園の大快報であったばかりでなく、朝廷全部の大歓喜であった。ことにブノワはこの約束において謙遜であっただけ、その成功が衆人を嘆賞せしめたのであった。朝臣はみな拍手して彼に祝意を表した。

第一の噴水に御感の深かった乾隆帝は、この工事だけでは満足されなかった。そしてまず洋館の付近に、次いで皇城の内庭に、また円明園の内庭に、それぞれ噴水を設置せよと仰せだされた。もちろん、ブノワはこの工事を担任した。こんどは国家的偏見や迷信や無智と戦うにはおよばなかったかも知れない。さりながら、元通り慎重に工事や作業を監視しなければ、中国の工人に渡しておいた設計図も雛形も規定通りに出来上らなかった。それゆえブノワは一日に数回、工房から工房へ、あるいは作業場から作業場へと馳け廻らなければならなかった。ことに彼は中国の工人に西洋水力学の理論を

教え込んで噴水工事に興味を持たせようと努めた。したがって彼等が時間を空費することを何よりも避けたのであった。しかし彼自身はかえって他人のために時間を割かなければならなかった。その結果、福音を宣伝したり、中国哲学を研究したりする余暇を見いだすことが不可能であった。かくて彼は睡眠時間を割いて伝道と研究の時間を算段しなければならなかった。他方、乾隆帝の研究心はますます旺盛であり、学理的説明を聞召されなければ満足されなかった。それゆえブノワは水圧の装置を御説明申上げ、噴水や貯水池の模型をはじめ、この種の珍奇な装置の模型を作って御覧に供し、皇帝の御選択に任せて、もっとも御意に召したものを製作しようと考えた。ブノワは生来、用意周到な人物であり万事に正確を期していたから、何よりも手違いを恐れていくどもいくども計算を繰り返していた。ゆえに噴水の築造は字義通り心身を消耗する大工事だったのである。

ついに乾隆帝は中国のヴェルサイユ宮殿といわれる円明園内に天下の粋を鍾めて宏壮無比な第二の大洋館を建設し、これにもっとも豪華な、もっとも珍しい噴水を配置しようと考えられた。そして設計図製作の御下命があり、敷地の決定をみたのであった。しかし将に工事に着手しようとした時、たまたま意外の事件が発生したので、遺憾ながらこの大工事を縮小しなければならなかった。とうとう、円明園の景致を美化するためにイタリー風の洋館を建設し、庭園の内部に噴水を設置することだけに止めたのである。その主要な原因は、ブノワが第一噴水構築のために激労をかさねた結果、心身の衰弱はなはだしく、とうてい、大工事を完成すべき見込みの立たないことにあった。乾隆帝はブノワの健康状態を思いやられて、出来るだけその労を省こうと思召されたのである。ついに第二洋館「海晏堂」が竣成し、噴水と貯水池（蓄水楼）が竣功した。噴水の導管はみな銅製であり、その主要部は人体の大きさを備えていた。この洋館は美しい水に飾られ、諸処に風雅な泉水が見えていた。もっとも大きい池はヴェルサイユやサン・クルーの池に匹敵していた。この西洋楼の西面に装置した噴水はブ

ノワがもっとも苦心を凝らしたものであった。彼は十二支の星獣を左右二列に六箇ずつ配し、一列ごとにかわるがわる獣像の口から水を噴き上げさせて一種の時計に供したのであった。

第三西洋楼「遠瀛観」の正面には「犬に追い詰められる鹿」が池の中央を占め、十数頭の犬が池中の鹿に向かって口から水を吐きかけるのである。左右には大水塔が立っていたので、たえず飛瀑の音が聞えていた。この噴水は野趣に富んでいただけに、豪快な気分が溢れていた。皇帝は観水法正面の玉座に坐して、噴水をあかず眺められていた。

二　模型芝居の献上と器械人形の製作

一七五二年一月六日（乾隆十六年十一月二十日）を期して、皇太后還暦の盛儀が宮中で執行されることに決定した。それゆえ、在朝の百官をはじめ地方の有司にいたるまで、この祝典のために忙殺されていた。そして聖寿万才を祝して諸省から天下の珍品や名器がぞくぞく献上されてきた。

北京の宣教師は、天文学者、美術工芸家もしくは時計師として在朝を許可されていたから、彼等もこの資格にふさわしい珍品を献進して皇帝の殊遇に報いようと考えた。彼等は苦心惨澹の末、器械装置の芝居を完成して、乾隆帝の御覧に供えた。その芝居は半円形で高さ三尺ばかり、内部にはすこぶる綺麗な絵を張り詰め前と左右におのおの三つの舞台面があり、どの舞台にも特別に描いた遠見の背景がついている。奥の舞台には中国服を着た人形が立っていて、その片手には「万年皇」という祝辞を書いた札を持っている。舞台の前にも中国人形が並んでいて、その人形は左手に金メッキを施した小さい銅の鉦を持ち、右手には同じ金属で拵えた小さい槌を持っている。この芝居は前に海を控え、後に泉水を控えている。泉水の中央に噴水があり、その水が滝のように落ちている。泉水は鏡を利用

して作ったもので、ランプで吹いた硝子の細い糸が、少し離れて眺めれば本当の噴水と見違えるほど、繊巧をきわめている。泉水の周囲には、欧字と漢字で書いた時計の数字板がついている。一羽の鷺鳥と二羽の家鴨が水中を跳ね廻っている。家鴨は嘴で水中の餌を漁り、鷺鳥は嘴で時刻を示している。全体は時計を進ませるゼンマイと同じ仕掛で動くのである。そして数字板の周囲には礎石が隠してあるから、鉄製の鷺鳥が数字板のそばを繞って時間を示している。時計が鳴りだすと、「万年皇」という祝辞を手にした中国人形が舞台の奥の部屋から現われてきて、その祝辞をうやうやしく見せる。すると他の六箇の人形がいっせいに時刻の数だけ鉦鉢を叩きながら音楽を奏する。それが済むと例の人形が奥の部屋に帰り、また時刻が来ると姿を現わすのである。この機械装置がたいそう御意に召した。皇帝は宣教師の献上品に謝意を表して、たくさんの賜金があったばかりでなく、宣教師が面目を施したことには、この機械装置が皇帝のしばしば出御される離宮の一室に飾られて、長く保存されたのであった。

宮中には、西洋の時計がたくさん集まっていたが、中国人は、時計については全然無識であり、無能であった。それゆえ、耶蘇会士の中で、時計師として来朝するものが多かった。雍正時代にはシャリエ（Chalier 沙叩玉）、乾隆帝時代にはヴァンターヴォン（Ventavon 汪達洪）が時計師として北京に到着したのである。シャリエは宿直用の時計を考察した。この時計は天下の逸品とも見做されるべきもので、少くともりっぱな芸術品であった。テボー（Thébault 楊自新）は勅命を拝してゼンマイ仕掛の獅子や虎を作った。この玩具は三、四十歩ほど歩くことが出来た。次いでシジスモンは同じゼンマイ仕掛の人形を製作中であった。もしこの玩具が成功した暁には、乾隆帝はしごく満足され、他の人形を作れと命じて「お前は人形を歩かせたのだから口を利かせよ」と仰せられるに違いなかった。中国では勅命に背くことが出来ないから、製作者は内心ビクビクしていた。テボーのあとを受け、ヴ

ァンターヴォンは花瓶を担いで歩きだすゼンマイ仕掛の人形を、二箇製作することになっていた。彼はもう八箇月、この玩具の製作を続けるはずであった。これらの人形にしても、虎や獅子の玩具にしても、その歩きだす原理は時計のゼンマイ装置を応用したものにすぎなかった。もっぱら中国皇帝の御意に叶う目的をもって、宣教師はおのおの苦心の末、時計の装置から思いついて、こういう新奇な玩具を作りだしたのである。

三、フランス耶蘇会士アッチレの絵画奉仕と官祿拝辞

十七世紀の末葉、フランス耶蘇会士ブーヴェに伴われてギラルヂニー（Ghirardini）というイタリー人の画家が北京に到着した。康熙帝は大いにこの洋画家を寵愛して、種々恩待を賜わった。そして一六九九年フランス耶蘇会士が西安門の賜域に北堂を建設した時、ギラルヂニーはこの会堂の装飾に妙技を揮った。しかし彼は、望郷の情にかられると、俗人であったから自由に帰国したのであった。ついで一七一五年（康熙五十四年）十二月二十二日イタリー耶蘇会士カスチリョーネ（初注参）が北京に到着した。彼は画家として宮中に出仕した。彼の専門は歴史画と肖像画とであったが、北京に来て見ると専門画を描く機会はほとんどなかった。彼はやむなく窓掛、屏風、衝立、扇などに花鳥を描いていた。それに当時の中国画は、画院風の厳密な写生であり極端な密写であった。少しも画家の奔逸な想像と実物の芸術化とが認められていなかった。この点からみれば洋画と中国絵とは、その精神においても、画風においてもまったく背馳していた。したがって宣教師が西洋の画風を発揮すれば乾隆帝の叡慮に叶わなかった。それゆえカスチリョーネは中国画の精神と妥協して、動物の毛も、魚の鱗も、葉脈もみな、実物通りの密画を描いていた。かくて乾隆帝はカスチリョーネの作品を尊重されて、この洋画

家を寵愛されるにいたった。みずからこの洋画家の弟子と称され、喪中といえども拝謁を賜わっていた。本当に御座所の傍に画室を賜わり、毎日出御されてカスチリョーネの画技を天覧されたほどであった。彼は皇帝の少年の頃、その尊像を描いたことがあった。そして帝は数十年後、この絵を御覧になり、左の一詩を賦して惜春の情を歌われた。

写真世寧擅　写真（肖像画）世寧、擅にす。
績我少年時　我が少年の時を績く。
入室曖然者　室に入って曖然たる者、
不知此是誰　このこれ誰れなるを知らず。

カスチリョーネは乾隆帝の尊像のみならず、香妃像をはじめいくたの肖像画を執筆した。彼は馬を描くことに妙を得ていたので、「百駿図」「十駿図」「馬技図」「春郊試馬図」「哈薩克貢馬図」の如き名画を残した。そのほか禽獣花卉を描いた名品が多数に上っている。

かのギラルヂニーもイタリー人であり、このカスチリョーネもまたイタリー人であった。カスチリョーネは乾隆帝の特寵を恣にしていたから、このイタリー耶蘇会士の言葉はすべて御嘉納になったのである。したがって伝道事業の鍵は、この人の掌中にありと言っても過言ではなかった。かくてイタリーの勢力が伝道の観点からも、また政治的見地からも、清朝に扶植されつつあったのである。この考え方が果して正当であったか否かはしばらく論外として、少くとも在朝のフランス耶蘇会士はこう解釈して一種の不安にかられていた。ゆえに彼等は、イタリーの勢力と拮抗せんがために、フランス耶蘇会士の中から画家を選出して、至急清朝に派遣されたき旨をパリー耶蘇会本部に懇請しておいたのである。この要求に応じてフランス耶蘇会士アッチレが、一七三八年（乾隆三年）八月、北京に到着したのであった。しかし彼は、まだ「師父」（Père）〔司祭〕の資格を持たず、たんなる「会昆」

(Frère)〔助修士〕にすぎなかった。

アッチレは北京到着の当初、ある親王、同夫人の画像をはじめ王侯、寵臣等の肖像を描いた。しかし、乾隆帝はもちろんのこと王侯貴人は油絵や西欧の画風を好まなかった。それゆえアッチレはせっかく祖国で修業してきた画風を棄てて、中国人の趣味に合致する新しい画風を考案しなければならなかった。すでにカスチリョーネが乾隆帝の尊容と尊妃の尊像を描いていたから、前述の通りアッチレは北京に到着して親王や諸侯の肖像を完成したばかりで、その後はもっぱら花鳥を油絵具で玻瑠板の上に、あるいは絖の上に花卉鳥獣の密画を描いていた。

カスチリョーネがすでに乾隆帝と皇后の画像を描き上げていたから、アッチレはこれらの尊像には筆をとらなかった。その他二、三の皇子皇女、寵臣、諸侯の画像を描いていた。しかし彼は自己の趣味と合致する絵を描いたことはなかった。ただ北堂装飾のためにいくたの大幅を描いた時には、天来の霊感に鼓舞されて自由奔放の神技を発揮した。なかんずく「守護天使」の一幅は傑作中の傑作と称されている。

一七五四年（乾隆十九年）策妄拉布担の後孫、阿睦爾撒納が達瓦斉を逐われて清朝に内付した。乾隆帝は彼等の降順を賞し、歓迎の盛宴を熱河の避暑山荘に催されることに決定した。すでに帝は北京から熱河に行幸の途中だったので、アッチレは小閑を得て「心霊修業」の儀式を行っていた。この時アッチレは突然、北京からこの避暑離宮に三日以内に来着すべしという勅命を伝えられた。彼はその用件を知らなかったが、もとより勅令を拒むことは出来なかった。それゆえ、大臣の徳公と一緒に匆惶、馬に鞭ち風雨を冒して北京から行幸の列に加わり、竜駕とともに避暑山荘の離宮に到着した。そして七月七日の夜、はじめて上意の内容を知ることが出来た。それはこの離宮で開かれるべき歓迎宴をはじめ、その他祝宴の盛儀を精細に描写し、少くとも素描せよという勅令であった。

ヨーロッパでは画家はだいたいの真景を保存すれば、天才の奔逸に任せて画図に想像を交えることが許されている。だから写生の命令に接したとて名工は決して困らない。それに自筆画に自信さえ持っていれば、他人の批判は大した苦痛ではない。しかし中国では、画家は他人の命令通りに原物を描き出して一点一画も省くことが出来ない。この意味からみると画家の芸術的天才は、ぜんぜん無視されている。アッチレはカスチリョーネと同じくこういう漢画と洋画の画風の差異に苦しまなければならなかった。

アッチレは勅命により歓迎の大典に列し、その終了するまで一心不乱に盛儀の拝観を続けていたが、不幸にして構想が纏まらなかった。言わば「総てを観たが何物も観なかった」のである。しかるに儀式が終るや否や、素描を天覧に供えよという厳命に接した。もとより勅命を拒むことは出来ない。アッチレはただちに一室に閉じ籠って、数本の鉛筆を削りだした。しかし頭はぼんやりして少しも印象が纏まらなかった。この盛典を表現すべき画図の核心を掴むことが出来なかった。アッチレは気がせいていた。ジリジリしていた。時刻はドンドン経っていった。室外には徳公が詰めきって、下図の出来上るのを今か今かと待っていた。そして中国皇帝の大命が、この洋画家の頭を重圧していた。しかし彼は眼を瞑って、しばらく考えていた。すると天来の霊感が心の眼を掠めた。かくてようやくモチーフを捉えることが出来た。それは威風堂々四辺を払って、歓迎場裡に出御し給う乾隆帝の英姿であった。この英姿を中心として天子の威儀に打たれる帰順者の風貌を並べて、これに景物を配置したので、鉛筆はにわかに進みだした。アッチレは最初に時間を浪費したので、ようやく夜更けてから素描を終えて、これを徳公に手渡すことが出来た。そして彼自身、離宮に赴いて皇帝の御返辞を待っていた。徳公は皇帝が素描を御覧になり「好々」と言われた由を伝えた。

翌日アッチレが素描の修正に取りかかっていた時、宮中から使者が馳せつけて、韃靼の将相が十一

人、清朝の高官に任ぜられたから、即刻、離宮に参殿して十一枚の肖像を描けという聖旨を伝達した。アッチレはその中の一つを描き終えてお手許に差し出すと、皇帝は見事だと褒められた。そしてあと六日間祝典の続いている間に、他の十枚の肖像を描き上ぐべきことを付言された。その頃アッチレは気候や食物の激変によって、気管支炎と下痢とを併発してかなり発熱していた。とはいえかかる病苦を冒して離宮に参候し、朝から晩まで、働かなければならなかった。その上肖像を描いている場所は廷臣連が演劇や他の技芸の始まるまで待合わせている一室であったからほとんど公開の席上に等しかった。ことにアッチレの辟易したのは、彼等が始終肩越しに絵を覗き込んで、絵とは無関係な質問を浴びせかけることであった。しかも彼は筆を運びながら、一々その愚問に答えなければならなかった。一言御断りを申せば、邪魔を避けることが出来たに違いない。しかし質問者は大臣宰相であり天下の諸侯であったから、アッチレは一言も言い出し兼ねたのであった。諸侯はアッチレにたいして主にフランスの事情を質問していた所からみると、彼等はこの宣教師を尊敬して歓ばせるつもりだったと彼は感じたのである。とにかくかような邪魔に逢い、その上無理に働いたので、とうとう病気がますます亢進して心身が衰弱しきってしまった。皇帝はこの報告に接して、アッチレの病状を憐み、休養を命じてとくに典医を派して診察せしめられた。しかしアッチレはわずか一日休養したばかりで、ふたたび参殿して仕事に取り掛り、指定の期間に十一枚の肖像画を描き上げたのである。

韃靼の諸侯は、肖像を描かれるのは生まれて初めての経験であった。それゆえ、画布の上に自分の顔立がだんだん現われてくるのを見ると、互いに話しあったり笑ったりしていた。そして絵具や画布を物珍しく眺めたり、運筆の進捗状況を見詰めたりしていた。ついに自分の風貌がぜんぶ描き上げられた時には、ウットリと自分の画像に見とれていた。側に居合わしていた清朝の大官は、韃靼諸侯の肖像画を嘲笑してはいなかったが、実物に対して冷笑を洩らしていた。なぜなら韃靼諸侯の風貌や挙

措や容儀が下品であり、とうてい、清朝の風儀や礼儀と相容れなかったからである。この場でもっとも緊張していたのは、画家のアッチレ一人であった。彼は一度に数人の質問に答えなければならなかった。ましてチラリとモデルの特徴を捉えて、これを紙幅に描出しなければならなかった。その上彼は画技によって、天子の御感にあずかることが絶対に必要だと考えていた。たとい健康であったにしろ、彼は周囲の人と違って、とうてい笑う気にはなれなかったのである。

画像が出来上るに従って、一々天覧に供えた。乾隆帝はユックリ画像を御覧になり、批判を加えられた。そして宦官が批評のお言葉を、アッチレに取次いで肖像画を返した。帝の批評はいつも讃辞であったし、周囲の人々も「好々」と言っていた。ことに毎日、官吏が式服を着たまま聖上の食膳の一部を、衆人の面前でアッチレの許に運んできた。周囲の人達は、こういう恩典に浴することを無上の名誉と心得て、羨ましがっていたのである。

その時までアッチレの世話をしていた徳公は、聖上の恩沢についてこの洋画家に妬情を感じ、その劣情を隠すことが出来なくなってきた。それでアッチレに嫌味を述べて腹いせをしていた。

「ここでは北京や海甸とは、全然違いますよ。陛下はやす〳〵と出御になりません。貴方の絵を描いている様子を御見物にいらっしゃらないのは残念の至りですね」と嘲るような口調で言っていた。

アッチレは肖像画を十一枚描き終って皇帝の承認を得ると、祝典の初日、下図を描いた聖上臨御の図の拡大を命ぜられた。徳公はすでに皇帝がアッチレにたいして種々恩寵を賜わったことを嫉み、折あらばこの洋画家の気色を害しようと考えていたから、アッチレとともに離宮の一室に入ると、すぐ徳公は「今日も陛下にはお目にかかれませんよ。ここは出御になるような場所ではありません」と断言した。アッチレは黙然として筆を運んでいた。けれどもこの言葉が終らないうちに官吏が入ってきて、皇帝の下賜品として絹二疋をうやうやしくアッチレに捧げた。そのあとからすぐ皇帝が出御され

た。そしてアッチレの健康状態を尋ねられ、しばらく画技を御覧になりいろいろ温言を賜わったあとで、お引取りの際、この部屋がアッチレの健康に適せざることを認められ、即時、大殿すなわち宝座の間に引き移れと徳公に命ぜられた。この大官はアッチレに手伝って、絵の道具を手にしながら運んでやらなければならなかった。大殿に遷ると、ほかの官吏が特殊な紙を目八分に捧げて運んでいた。これは御料の用紙であった。そして韃靼の某侯が弓を絞ってとくに虎を射んとする馬上姿を描くべきこと、ならびに皇帝自身これに賦彩遊ばされる旨を伝えた。もちろん、アッチレは御意に服した。

翌日、彼は絹本四枚を渡されて、離宮の庭園に出でて、今後描くべき祝典演戯の背景を準備せよという勅命に接した。アッチレは命令を厳守した。彼は徳公と一緒に、御苑に入って下図を描きだした。皇帝は遠くからアッチレの姿を見そなわして、御苑にお出ましになり、彼のそばに佇みながら写生図を御覧になり、御趣味に合わざる部分を訂正され、また御意に召す図形を補わしめた。そして、畏くも疲れないかと御下問になり、ゆっくり筆を運べという優諚さえも賜わった。それから二日間は出御を見なかった。そのためにかえってアッチレの仕事が捗ったのである。

乾隆帝は三日目に出御されてアッチレの素描を御覧になり、乗馬の御姿と轎に召される御姿とがあまりに反り気味であるのを指摘され、この欠点をかき改めるため、側の玉座に腰をかけられて尊容を写生せしめられたのであった。その日はたいそう暑かったから、帽を脱いで椅子に腰かけよとアッチレに命ぜられた。いかなる顕官にせよ、また執務中といえども、御前にあっては拝跪するか、起立するかが臣下の義務であった。しかるに皇帝はこの洋画家のみには破格の優遇を賜わったのである。

翌日もまた臨御をみたのであった。そして皇帝はアッチレの描いた韃靼騎士射虎の図に基づいて、騎士投槍の図を御親筆になり、この絵に修正を加えよと命ぜられた。アッチレが補筆を終ると、皇帝はこの絵を御居間に運ばしめられたが、夕暮アッチレの許に届けさせて御筆の完成を命ぜられた。こ

の画には騎士の箙と長靴と馬の尻尾を描き添えることだけが残っていた。しかし用紙の朝鮮紙がもう尽きてしまった次第を申上げると、乾隆帝はワザワザ海甸に徳公を派して、カスチリョーネの手許から取り寄せよと命ぜられた。この使者の出発したあとでも、アッチレは安閑としてはいなかった。彼は前述の素描のほかに、盛儀に出席していた諸侯の肖像を描かなければならなかった。そして一幅ごとに皇帝の承認を得る必要があった。そのために困難がいや増した。二幅の肖像にいくどか修正を加えなければならなかった。この二幅は陛下の御趣味と違っていたからである。またアッチレは徳公の肖像を、あまりに本人の真を写そうと努めた結果かえって失敗した。皇帝はこの寵臣の昔の眼付を愛されていたから、その通りの眼付を写すこと、またその顔を少し俯向き加減に描くことを命ぜられた。もちろん、こういうお好みは画家の意図ではなかったが、アッチレは天子の趣味に服従するために全力を尽したのであった。彼はいかほどモデルの特徴を摑もうとしても、精神が纏まらなかった。すると徳公は顔の特徴が摑めなくとも、罪は此方にないと言って、アッチレを冗談まじりに咎め立てた。徳公の肖像画を除けば、作品は素晴しい出来ばえであった。皇帝は讃辞を賜わった。したがって朝臣達もみな、讃辞を振撒いた。

そのうちに海甸から朝鮮紙が到着した。乾隆帝はこの報に接すると大殿に出御され宝座に腰かけて、すぐ尊像を描けとアッチレに命ぜられた。彼ははじめてこの優諚に接したので非常に緊張し、かえって美的空想が思うように活動しなかった。とにかく最初の下図をかき上げると、皇帝は御覧になり、玉座から立ち上って「見事である。朕は二時間腰かけていたから、今日はこれで十分である」と言われた。皇帝がこの素描を嘉賞された訳は、お顔が大きく人並以上に上半身の描かれていることが御気に召したからであった。皇帝は再三、尊影を大きく描くべきことをアッチレに仄めかされた。なぜなら西洋画家は、これまで尊顔を小さく描きすぎると考えていられたからである。彼等は皇帝の暗示を

理解しなかったから、皇帝の御意志に気がつかなかった。しかるにアッチレの写生中、真向いに控えていた宦官が、頭の上で大きく両手を拡げて皇帝を指さした。もちろん、皇帝はお気がつかなかった。もう一人の宦官は、皇帝に聞えるほど高い声で竜顔を大きくせよと教えた。皇帝はこの言葉を承認された。アッチレは万事、仰せに従って筆を運んだのであった。皇帝の退出後、アッチレは素描に修正を加えた。数日後これを御覧になり、たいそう御満足におぼされて優諚を賜わった。乾隆帝はアッチレが御注文通りに描き上げるので、彩色の画像を描かせたいと思われた。それで射技のお姿を描かせようと考えられ、その背景を選ぶために、御苑に出頭せよとアッチレに命ぜられた。彼は適宜な背景の下図をつけて、宦官の手を経てこの素描を御手許に差しだすと、陛下は御嘉納になった。

さて徳公は乾隆帝の聖旨を伝えるため、遠方に出張することに決まった。彼は陰暦六月十一日出発の途についたが、その前にアッチレを訪ねてしきりに祝辞を述べたてた。アッチレは乾隆帝の尊像を描いて成功したことを祝してくれることと考えて、あまりに気にとめなかった。しかるに下僚が訪ねてきて、またもや祝辞を振撒くので、アッチレは怪訝に考え、その理由を尋ねると、皇帝がアッチレを官吏に任用された次第を洩らした。

「私をですか」と、アッチレは素気なく訊ねた。

「そうですとも。朝廷の人達はみな、御存じでいらっしゃいます。それだのに、まだ御承知にならないのですか」

アッチレはこの言葉を聞くとすぐ皇帝の御機嫌を損ぜずに恩命を拝辞すべき道を考えたのであった。実際、御前付きの宦官や官吏が、アッチレにたいする陛下の恩寵を見て、多年の経験から必ず官吏に登用されることを彼の前で断言したことがあった。その時アッチレは、キリストが世俗の栄誉を棄てて天上の幸福のために殉教の血を流したことを話して、世外者の義務を説いたのであった。とにか

くアッチレは帰堂して、他の同僚に官吏任用の恩命を拝辞したい意図を打ちあけた。同僚も彼とまったく同じ意見であり、恩命を辞退せよと勧めた。アッチレは自分の意見が、フランス伝道団の意見と一致したので、救われたように嬉しかった。

間もなく徳公は御用先より帰ってきた。彼は夜の九時ごろアッチレを私邸に呼び出して、皇帝がアッチレの奉侍を嘉し、ことに大尊像を描いたことを賞して、特旨をもって四品官に任じ、食禄を賜うべきことを告げた。しかるにアッチレは、この閣老の前に跪いて、両眼に涙を浮かべながら、自分は僧侶であり疾に地上の栄華には用なき身であるから、皇帝の特旨を拝諾いたしかねる次第を主張して、かえってこの顕官に向かって、陛下にたいするとりなしを求めたのであった。けれども、この大臣は宮中画家のカスチリョーネをはじめ、欽天監に奉職する耶蘇会士もまた清朝の官吏たることを説いて、アッチレの主張を覆えそうとした。アッチレは、カスチリョーネが画家として清朝の官吏に登用されたことは、その本意にあらずと答えた。すると徳公は官吏の名誉を拝辞しても、その俸禄は受諾すべきことを勧告した。アッチレは、僧侶としては名誉と同じく俸禄をも拝辞することが正当であると主張して、一歩も譲らなかった。徳公はアッチレの辞意をとうてい翻すことが出来ないと悟って、これ以上は固執しなかった。その夜アッチレは聖母と耶蘇会の開祖イグナチュース・ロヨラとのとりなしによって、神の恩寵に接することを祈ったのであった。

翌日の明け方からアッチレは徳公の門前に佇んで、その参内を待っていた。彼は大臣の姿を見ると、その足下に跪いて前日の懇願を繰り返した。この大臣はアッチレの真意を解していたから、皇帝に執りなすべきことを誓った。

アッチレは例刻通り参殿するや否や、御苑に参れという勅命に接した。御苑では皇帝が、弓の稽古をされていた。そしてアッチレの姿をみそなわすと、近よって弓の稽古をよく見よと仰せ出された。

数本の矢を射られたあとで、皇帝はアッチレをチラリと御覧になり、四品官の印である青い硝子玉が帽子に付いていないのを怪しみながら、皇帝は徳大臣を顧みて、勅命を実行したか否かを質問された。それで大臣はアッチレが官祿をともに固辞した旨を奉答した。皇帝はこれを聞いて一言も発せられなかった。

弓の稽古が済んでからアッチレは元の部屋に引取って、絵画の修正をしていた。すると皇帝はお出ましになり、小形の肖像画の方がよく似ていると褒められ、なお多少の修正を加うべきことを希望され、修正が出来るか否かを問われた。アッチレは今でも修正出来る旨を申上げると、宝座に腰かけられて、アッチレにもくつろげと言われた。そしていろいろ絵画に関する御質問がすむと、にわかに親しみ深い口調でこう言われた。

「官吏になりたくない由を承ったが、いったいどういう訳か」

「陛下はその理由を御存じのことと存じます。私は僧侶でございます。こういう名誉は私の身分と一致いたしませんから、御辞退申上げたのでございます」

「しかしカスチリョーネは正に官吏である。けれども、そちと同じく僧侶である」

「それには相違ございません。でも彼はいくどもこの名誉を御辞退いたしたのでございます。ただ陛下の絶対的な御命令によってお受けいたしたにすぎません。陛下もこのことは御存じの筈でございます」

（実際、乾隆帝はいろいろな機会にカスチリョーネを官吏に登用しようとしたが、彼は辞退した。しかし皇太后の勧告により、帝は絶対権によって彼を官吏に任じたのであった）

「そしてハレルシュタインも僧侶ではないか」と、陛下はかさねて言われた。

「左様でございます。彼は欽天監監正でありますから、やむなく仰せによって官吏になったばかりで

あります」

「しからば、そちもまた、ある役所へ入って役目を行えばよろしい」

「私はそれほど中国語がよく話せませんし、また解りません」と、アッチレはたくみに皇帝の鋭鋒を避けたのであった。乾隆帝はアッチレの返辞にたいして、しごく御満足の体に拝された。そして話題を他に転ぜられた。

アッチレは熱河の離宮に滞在すること五十余日、そのうち四十日は聖旨を奉じて朝から晩まで絵事に精進したのである。実に油絵は肖像二十二種、大幅の水絵四種、そのほか祝宴の大幅、多数をかき上げたのであった。ついに過度の労働と気候の変化とにより、彼はますます健康を害し、海甸に帰着後、激しい坐骨神経痛に羅って、二週間、蟄居しなければならなかった。

ポルトガル伝道団のカスチリョーネとハレルシュタインは官吏の名誉を受諾したにもかかわらず、フランス伝道団のアッチレはこの礼待を固辞した。このことは清朝の官吏からみれば狂気沙汰にちがいない。しかし世外の僧侶としては当然の処置である。この噂が世間に聞えると、この徳行は中国の天主教徒ばかりでなく一般人を感心させ、ひいて、天主教そのものにたいする尊信の念を増進せしめた。同時にアッチレはフランス人であったから、彼の祖国にたいする中国人の信頼もいや増したのであった。

四　「得勝図」の製作とその西送

乾隆帝は準鄂爾部と回部の戡定を終ると、この戦勝を長く後代に記念しようと欲して、在朝の耶蘇会士カスチリョーネ、アッチレ、シッケルバルト、ダマセーヌの四名に命じて「得勝図」を描かしめ

られた。

カスチリョーネ署名(補足三)

格登鄂拉斫営 (On force le camp établi à Gaban, 1765)

黒水囲解 (La levée du siège de la Rivière Noire, 1765)

アッチレ署名

和落霍斯之戦 (La victoire du Khorgos, 1766)

阿爾楚爾之戦 (Le combat d'Arcul, 1765)

平定回部俘献 (On offre à l'empereur les prisonniers faits lors de la pacification des tribus musulmanes)

シッケルバルト (Sichelbarth 艾啓蒙) 署名

平定伊犁受降 (On reçoit la soumission de l'Illi, 1765)

ダマセーヌ (Damascène 安德義) 署名

庫隆癸之戦 (Le combat de Khurungui)

伊西洱庫爾庫爾之戦 (Le combat du Yesil-kol-nor)

霍斯庫魯克之戦 (Le combat de Qos-qulaq)

烏什酋長献城降 (Le chef d'Us-Turfan se soumet avec sa ville)

呼爾滿之大捷 (La grande victoire de Quaman, 1765)

拔達山汗納款 (Le khan de Bardakhsan demande à se soumettre)

郊宮回部成功諸戦士 (L'empereur se rend dans la banlieue pour prendre personnellement des nouvelle des officiers et soldats qui se sont distingués dans la campagne contre les tribus musulmanes)

署名なきもの

鄂墨札拉図之戦 (Le combat d' Orai-jalatu)

通古思魯克之戦 (Le combat de Touguzlaq)

凱宴成功諸将士 (L'empereur offre un banquet de victoire aux officiers et soldats qui se sont distingués)

一七六五年(乾隆三十年)七月十三日、乾隆帝は「得勝図」の印刷に関して、左の上諭を発せられた。

「朕は準噶爾部、回部を征服して大勝を得たり。この大勝の画図十六葉をカスチリョーネと、その他、北京において朕に奉侍する宣教師に命じて描かしめたり。この下図をヨーロッパに送らんと欲す。ヨーロッパ第一の銅版師を選ぶべし。それは各図を精細に、完全に銅版に表現しえんがためなり。その費用は即時、支払うべきことを命ず。この下図が名工中の名工によって彫刻されんこと、および銅版画百葉を印刷したる後、この百葉とともに銅版を朕がもとに送付すべきことを希望するものなり。

他の下図十二葉については一回、四葉ずつ三回に分かちてヨーロッパに送るべきことを命ず」

カスチリョーネはこの上諭をフランス文に訳して、フランス絵画アカデミー総裁にたいして、依頼状を添え上諭と同じ日付をもって広東の耶蘇会に送った。カスチリョーネの依頼状の内容は左の通りである。

「私は勅旨を奉じて、上諭に御依頼状を添付いたします。上諭をお読みになっただけで、この石版彫刻の任を帯びべき芸術家が正確に原図を恪守されるに違いありません。しかし皇帝をして少しも遺憾を感ずる余地を残さないために、また芸術家の名声を傷つけないためにも、左の二件をお願いする義

務があると存じます。

第一、これらの版画が鑿により、あるいは硝酸によって彫られるにしても、画面がもっとも繊麗に、もっとも優美に表現されるよう御注意ありたきこと。あれほど偉大な皇帝に改めて捧呈される作品にふさわしく、もっとも端麗にかつもっとも鮮明に、銅版画を製作するよう御注意ありたきこと。

第二、皇帝の御注文通り枚数を印刷した後で、石版が磨滅した場合には、中国にて再印刷する時、初刷と同じほどの美しさを保存せんがために、石版を修正し、修覆することが必然的に必要なるべきこと」

「得勝図」の中で「格登鄂拉斫営」「黒水囲解」「阿爾楚爾之戦」「平定伊犂受降」の四図がまず広東の耶蘇会に向けて発送され、それからパリーに回送されて、翌年該地に到着した。ところが数年を経ても印刷画は東送されなかったし、なんらの消息にも接しなかった。乾隆帝はすこぶる焦躁を感ぜられていた。

五　「坤輿全図」の作製

明末にリッチの「万国輿図」(補注五)があり、康熙時代にはフェルビーストの「坤輿全図」があり、フランス耶蘇会士の測成した「皇輿全覧図」があることは前述の通りである。

乾隆時代には「大清一統志」が官撰された。その他、閻若璩、胡渭、顧炎武、顧祖禹にも地理の著述があり、県志の編纂は清代にいたって隆盛をきわめた。乾隆帝は地理学に興味を懐かれ、しばしば古代地理および近代地理についてブノワに御下問があった。それゆえブノワは噴水を構築して以来、心身消耗していたにもかかわらず、皇帝の意を迎えて天主教解禁の歓びを見んがために、世界地図作

製の決意を固めたのであった。

ブノワが余暇をみてこの地図の製作に取り掛っていた時、彼と親交のあった中国の大官が製作中の地図を見、知命の聖寿を祝してこの地図を献上せよとブノワに勧めた。ゆえにブノワはこの勧告に従い、世界地図の製作に精進したのである。この地図は各半球が直径五尺にわたるもので、高さ一間余、長さ二間余の巨大なものであった。

周囲の人達はブノワの熱意に驚くと同時に、彼の健康状態に不安を禁ずることが出来なかった。この地図は皇帝に献上するものであるから、地名その他を漢字で書く必要があったので、ブノワは中国の学者に漢字の記入を頼み、また下図を浄写する必要から国中の画家にも助力を求めた。

乾隆帝は地図献上の件を聞かれるとたいそう御満足に思召され、ブノワの健康を軫念されて第一流の名医をブノワのもとに遣わされた。

この名医はブノワの衰弱に驚き、たとい彼の命令通りの摂生法を行っても、ブノワの余命はいくばくもあるまいと診断したほどであった。

幸い世界地図の製作は完了した。そしてブノワは天体と地球とに関する説明のみならず、地球を初め他の遊星、恒星の廻転に関する新学理の説明をこの世界地図に添えて献上した。さらにフランス国王が学問、技術の完成のために、なかんずく地理学、天文学の発達のために大企画を命ぜられたことを述べて、その企画の内容について概略を紹介しておいた。またこの記述の中で、フランス国王の勅命を奉じて天文現象の観測、地球経緯度の測量という目的のもとに多数の学者が世界の各地に派遣されたこと、そして諸国の帝王がこれらの学者を歓迎したことを述べ、またブノワが説明書の中で参照したカシニー、ラ・カイユ、ル・モニェの如き有名な天文学者の名をあげた。乾隆帝は地図と説明書とを嘉納され、長時間、天文学と地理学とについて御下問を賜わった。皇帝はこの地図を衆人稠座の

前で褒められ、ブノワに絹数疋を下賜された。

ブノワはわざと図形に一々説明句をつけておかなかった。それで乾隆帝はこの説明句を要求され、中国学者に命じて、その辞句を漢文で転写させようと欲せられた。しかしブノワは、外国人であるから、用語上誤解が多少生ずる危険のあることを申上げて、世界地図が宮廷に展観される前に、中国の学者に命じて辞句を調査し、訂正されたき旨を懇願したのであった。帝は、文章上の間違いが生じてもブノワ自身に責任がないから安心せよと宣われ、百方満足のゆくよう、取計らわれることを仰せ出された。

乾隆帝は、ブノワの説明書を、即時調査し、意味を変えずに文章も訂正せよとある親王に命ぜられた。この親王は皇帝の叔父で、生来、暦数に長じ、欽天監に出仕する耶蘇会士の保護者であった。調査は内務府に持ち出された、この内務府には勅命を奉じて文学書類を編纂している学者が集まっていた。この役所に中国の暦数学者を呼び寄せて合議したが、彼等は最初ほとんどみな、ブノワの説に異論を申立てたのである。

ブノワは「世界地図」の中に新しく発見された諸国を加え、また新しい地理学者が削除した諸国を削除し、また旧諸国の若干を新しい観測によって認められた地位に置いたのであった。しかし中国の暦数学者は、かかる変動や変改を認めなかった。彼等はしばしば地動説を聞いたことがあったが、この説を信じていなかった。宣教師が彼等に星図表を与え、彼等が計算のためにこの表を利用しているが、この表こそ地動説に基づくものである。彼等は学説の結果を利用するにもかかわらず、この学説を認めていなかったのである。乾隆帝が地動説を承認されるならば、彼等自身もこの学説を信奉しなければならないと取越苦労をしていたせいかも知れない。乾隆帝の叔父にあたる某親王はいつもブノワに好意を持ち、その主張を弁護していたが、数回会議の結果、報告書を皇帝に捧げ、ブノワが地図

の中で行った更改を正当と認めた。そしてブノワの記述の内容が確実であることを主張した。かくて乾隆帝は、㈠ブノワの作成した「世界地図」をもう一葉製作すべきこと、㈡第一図を宮廷に収め、第二図を地図の保管所に収むべきこと、㈢文学書類の編纂に従事している学者の中から二、三名を任命してブノワの説明書の中で欠陥のある文章は意味を改めずにその欠点を訂正すべきこと、㈣訂正を加える必要があれば、必ずブノワと合議してこれを行うべきこと、㈤宮中に収蔵される種々の地球儀の中に、ブノワの作成した地図の中に書き込まれた新地名を記入すべきことを命ぜられた。この勅命を履行するために約二年間、あるいは宮中、あるいは教会の中で、中国の学者とブノワとが会議を重ねたのであった。かかる過程を経て、一七六七年「坤輿全図」が完成したのである。

六　「得勝図」の試刷延期

かの「得勝図」の下絵がパリーに到着すると、当時の絵画アカデミー兼造営局総裁マリニー侯(Marquis de Maligny)がいっさいの事務を担任した。しかしその後数年を経ても、なんらの消息がなかったので、乾隆帝が焦慮されていたことは前述の通りである。

しかるに一七七〇年（乾隆三十五年）頃ブノワは広東のフランス耶蘇会を経てコッシャンの来書を受取った。コッシャンの意見によれば、「得勝図」の銅版彫刻が繊細をきわめているという理由から見ても、北京でこの銅版を印刷することは困難な仕事であるから、乾隆帝の要求されるものよりも大きい版画をフランスで多数印刷し、それから原版と印刷画を中国に送ると同時に、ヨーロッパの印刷用紙、インキの原料および印刷説明書をも送るべきことを通告してきた。乾隆帝は恒例の韃靼狩猟から還御されていたから、ブノワはこの書状を漢訳して訳文を円明園に携行し、伝奏を宮内官と宦官と

に頼んだ。しかるに彼の予想通り彼等は伝奏を肯んぜず、銅版画印刷の件については〔両広〕総督と同地の税関長が皇帝の依嘱を受けているから、ブノワが広東の耶蘇会に照会して、この会から広東の中国官憲にコッシャンの意見を伝え、広東の官憲から皇帝にこの来旨を伝達するのが順当であると主張した。この手続は即時、実行された。そして乾隆帝の回答は、各図二百枚ずつパリーにおいて印刷すべきこと、印刷の完了するにしたがって原版とともに印刷画を東送すべきこと、ヨーロッパから印刷用紙やインキの原料を送る必要なきことであった。そして聖旨の原文はフランス語の訳文と一緒に特別便をもって、わずか十二日を経て広東に送られた。

その後、二年を経て、すなわち一七七二年十二月上旬、ブノワが「皇朝中外壱統輿図」の作成に忙殺されていた頃、フランス政府から七種の原版と一緒に、皇帝の要求された各図二百枚の印刷画が北京に送られてきた。皇帝は天覧を賜い、すこぶる満足の意を表せられた。そして北京において七種の銅版画の試刷を行えと命ぜられた。この難事を仰せつかったのもブノワであった。前述の如く彼は中国地図の彫刻や印刷に成功したにしろ、その彫刻はコッシャンの如き名工の刀痕に比すれば、すこぶる粗雑なものであった。かかる名画の印刷にたいしては、地図の印刷とは別種の意味において細心な注意を払わなければならなかった。それゆえブノワは上書して「得勝図」の如き繊麗な密画の印刷については、とくに慎重細密な注意を必要とすること、しからずんばせっかくの名画も、その図様を損じて価値を失うべきこと、たまたま沍寒の候に際しただちに印刷に着手しがたいから、春暖の候を待って印刷に着手すべきこと、その間に印刷機、そのほか万端の準備を整えることを主張して、聖断を仰いだのであった。皇帝はこの上書を御覧じて、ブノワの主張を認め、作業の遅延を許されたのであった。

七　「皇朝中外壱統輿図」の作製

一七七二年頃（乾隆三十七年頃）皇帝は、中国全土および辺疆諸国の新地図を作成せよと仰出された。この重任を拝してこの事業を統率したのもまたブノワであった。この地図は大きさがいろいろ異り、緯度と緯度との距離が一寸二分と二寸五分とのものであった。原図の作成が終ると皇帝は、新地図を二枚ずつ木版に印刷し、また大きい方のものすなわち緯度の間が二寸五分にわたる地図は、これを銅版で印刷せよと命ぜられた。木版印刷については古来、中国人はこの技術に長じていたから、宣教師の助けを借りる必要がなかった。しかし銅版印刷については、初期の宣教師がその製作法と印刷法とを彼等に教えたことがあり、銅版で中国全図を印刷したことがあった。ところが乾隆時代にいたると、この技術に通ずる中国人はもちろん、宣教師すらも発見することが出来なかった。ついにブノワが選ばれて、またもや銅版印刷事業の難局にあたったのである。もとよりブノワはこの種の知識が皆無なことを申立てて、この重任を固辞したが、当局は絶対に辞退を許さなかった。それでブノワはやむなくこの事業を引受け、洋籍を猟ってその完成を期したのであった。

大きい地図は百四枚の図版から成立ち、その図版はそれぞれ高さ二寸五分であった。そして各図は緯度五度ずつを包容していたから、各版の高さ一尺二寸五分に達した。ブノワはもっとも技術に熟練した中国工匠を選んで、銅版に彫刻せしめた。銅版の厚さについても彼はヨーロッパで普通に行われるものを選ぼうとしたが、中国の工匠は堅固を旨としてブノワの説を容れず、ヨーロッパのものよりも数倍厚い銅版を使用した。幸いに彫刻はきわめて鮮明であった。印刷については宣教師の使用していた印刷機のモデルを示し、インキの作り方、紙の準備法、すべて作業に必要な知識を中国人に授けた。数枚試刷を行い、しばし稽古を積んだあとで、ついに百四枚の小図から成立つ一葉の大地図を印

刷することが出来た。そして天覧に供えると皇帝は非常に満足され、さらに百葉増刷せよと命ぜられた。この大地図を百葉印刷するためには、一万四百枚の小図を印刷しなければならなかった。以上の事実が「皇朝中外壱統輿図」(補注三)の作成された経過である。

八　パンシの尊像写生

一七七三年（乾隆三十八年）フランス耶蘇会士パンシ(補注三)がメリクールとともに北京に到着し、同年一月十六日自筆画、望遠鏡および排気機を献上して、新来の儀を叡聞に達した。（後章参照）

同年一月二十日ブノワとパンシとは早朝から宮中に参内すると、御座所に近い一室に導かれた。ほどなく宦官が二十七、八歳ぐらいの扈従(こじゅう)をつれてきて、その画像を描けよという勅旨を伝えた。それで、パンシは扈従の顔を写生しだした。乾隆帝はパンシが鉛筆で素描をはじめるとすぐ、この素描を取りよせて御覧になり、すでに扈従の顔立が認められると伝えられた。鉛筆の素描がすむと、パンシはこれに色彩を施した。皇帝はこれを御覧になり満足の旨を伝えられたが、とくに陰影に関する御意見を付言された。中国画では洋画におけるよりも、ハッキリ陰影を施すのであった。その目的はただ画中の物体を引き立てるだけに止まっていた。

皇帝はパンシの運筆が進んだ頃を見計らって、絶えず素描を取りよせて瀏覧(りゅうらん)された。その都度(つど)パンシは、運筆を中止しなければならなかった。皇帝が描きかけの作品を御覧になって描きなぐりだと思召されるかも知れなかった。パンシがこの心配をブノワに打ちあけると、ブノワはカスチリョーネやアッチレの前例を引いて、皇帝は洋画の完成経過を御存じであるから、そういう心配には及ばないと言ってパンシを宥(なだ)めた。

一月二十六日、パンシとブノワとは参内し、中国画家と一緒に吉祥宮に参殿した。パンシは引続いて、扈従の画像を描いていた。しかるに皇帝はパンシの画技に満足されたので、この画像の製作を中止して皇帝の画像を描くべき御諚を賜わった。それゆえブノワとパンシとはただちに御座所に伺候した。すると拝礼の終らないうちから、皇帝は通辞のブノワを介して、パンシの年齢や所属会堂の名称を問われ、また尊像製作に関する意見を徴せられた。ついに正面像を描くことに決定した。ヨーロッパで流行している、やや横向きの画像は中国人の趣味ではなかった。正面像は顔の両側の等しい部分が、平均して画中に現われなければならない。そして光線の反射によって陰影の生ずる差異が、顔の両側面に表現されなければならない。ゆえに肖像はいつも観る人を正視している必要がある。それゆえ、正面像はやや半向きの側面像より、はるかに成功しがたいものなのである。

皇帝は万機の親裁に忙しく、とうてい写生のために長い時間を割くことが出来ないから、旧時の画像を描写し、これに現時の風貌を描いて加味し、旧像に修正を加えれば現在の肖像を完成することが出来ると主張された。いかに勅言とはいえ、パンシもブノワも皇帝の主張を認めることが出来なかった。彼等は人間は年齢と事情とによって風貌に変化を生ずるものであるから、今、尊顔を写生して旧時の尊像にこれを加味しても、昔日の竜顔が躍出して絶対に現在の画像を完成しがたい次第を伝奏した。皇帝はこの主張を聞召され、快くその道理を認められたのであった。次いでパンシとブノワとを御居間に迎えられた。皇帝はブノワに向かって

「そちが北京に来た当時からみると、朕はすっかり昔と違ってしまった。あれから何年になるかね」

と、訊ねられた。

「陛下、私がここに参りましてから二十七、八年たちます。陛下が北京の宮殿と円明園の離宮とを水法で御装飾になろうとして、工事の監督をお命じになりました時、私ははじめて陛下とお言葉を交わ

す光栄を持ちました。それから二十六年たちました」と、ブノワは答えた。

「それならその頃、朕がいかほど痩せほそっていたかを覚えておるだろう。あの時から一度も朕を見たことがないなら、今日こんなに肥ったので、朕を見違えるに違いない」

「お肥りになったのは、陛下がしばしば体育をなさるからでございます。またこれほどお肥りになるべき養生法を守っていらっしゃるからでございます。ふつう年を取るにつれて、体力と健康の衰えが感ぜられます。これに引きかえ陛下の体力と健康とは、年とともに盛んになられるように御見受けいたします。それは万民のために陛下の長寿を望まれる神の恩恵でございます」

「朕は壮健な気持がいたしても、顔立ちが年ごとに変って行くのが解るし、また昔肖像を描いてくれた当時の顔とはまったく違ってしまった。だから潘廷璋（パンシの漢名）の申すことは正しい。ゆえにここで朕の画像を描かせる必要がある。また朕の画像を巧く描き上げるのに、もっとも適当な場所に着くがよい」と、乾隆帝は言われた。

次いで皇帝は写生に要する時間や、写生中には読書や書きものをしても差支えなきか否かと問われた。ブノワはパンシに尋ねた後で、最初の素描には二、三時間を要すること、数日後絵具の乾いたとき、第二回の賦彩を施すこと、それには最初の素描の出来具合によって彩色の時間に加減のあること、写生に差支えがない限り、読書、執筆その他は差支えなきこと、すべて御意のままなるべきことを奉答したのであった。

いよいよ尊影の写生に取りかかることに決定した。皇帝は背中を東に向け、黄色い緞子の蒲団の上に脚を交えて韃靼風に腰かけられた。同じ裂地の蒲団を壁に立てかけられて、皇帝は、その上に靠れられた。左右には八寸から一尺ほどの小卓があり、その上に筆、墨、硯、いろいろの紙類、二、三冊の書物が置いてあった。裏毛の御服を召されていた。その毛皮はもっとも美しい貂の皮より十倍

ほど貴重なるものであった。新年の儀式中であったから、皇帝は五爪の竜を刺繍した黄色の綾織を召されていた。帽子は黒い毛皮製で、上部には真珠が一箇飾ってあった。ブノワはこの真珠を近く拝見して手にしたことがあったが、その大きさは一寸余りであった。この真珠の下部はやや卵形になり、上部が低い山形に分れていた。皇帝は、話に興ぜられたり、おそばの調度品を手にされる時には、頭や腕や上半身を動かされることはあっても、脚を動かして姿勢を頽されたことは絶対になかった。この体を拝見して、パンシとブノワとは酷く敬服したのであった。姿勢を頽されることは、それ自体では大したことではないかも知れない。しかしこれによっても皇帝が安楽の追及を表わすべき動作はいっさい避けよと、韃靼人に教訓される事情が首肯されるのである。またこの実例に接すると、皇帝が練達堪能の士といえども、懦弱な生活に耽り余りに安楽を追及する者を処罰し、恩寵すらも剝奪されるのは当然の次第だと、しみじみ感ぜられたのである。

皇帝はパンシをおそばに近づけ、尊顔の特徴に関して、親しく注意を加えられたあとで、いよいよ写生の開始を命ぜられた。パンシは玉体から八尺ほどの距離に画架を据え付けて、下図の筆を下ろした。乾隆帝はブノワを相手にして、北京に東西両堂のある理由、宣教師が中国に渡来するまで従事していた仕事、彼等が中国に来朝する理由、また僧侶以外の外人をほとんど見かけない理由、僧侶となる年齢期、僧侶になってから科学と技術とを修業したか否かについて御下問があり、ブノワは一々奉答したのであった。そしてブノワは修道者となるには自己を完成し他人を完成するために精進しなければならないこと、修道者は他人を完成するためにヨーロッパでは青年に文法、雄弁学、哲学、数学を教えること、しかしこれらの学問は第二義のものであること、第一義は天主教を説いて悪徳を矯正し風俗を改善すること、絵画、時計、爾余の技芸を知っているものは、余技としてその研究を続けること、そして北京に渡来したいと考える時よりほかにはこれら技芸を学ばないこと、乾隆帝が絵画、

時計等を賞美されるので、宣教師はこれらの技芸を研究すること、なかんずく天分を自覚するものは、かかる技芸を学びだすものさえある次第を申上げた。

すると皇帝は、パンシが僧職に就いてから絵画を学んだかと尋ねられたので、ブノワは次のように奉答した。パンシはイタリー人であり、渡華前は俗人画家であったが、結婚を欲せずほとんど僧侶に等しい生活を続けていた。かねて北京在朝の宣教師がりっぱな画家を二、三名入用な次第を、中国伝道に熱烈な関心を有する本国の人達に通じておいた。それで当局者はパンシの画家としての令名を聞き、その人となりを尋ねた。そして適任資格を認めた結果、僧職に入って乾隆帝の御用に役立つべく渡華すべきことを彼に勧めたのである。もちろんパンシは快諾した。この奉答を聞かれて帝は、パンシが僧侶にならなければ渡来しなかったかと反問された。それでブノワは然らざる旨を復答し、パンシを僧侶として支那に差遣した理由は、北京の耶蘇会がかつて俗人画家（ギラルヂニー）の処置に困ったからであった。当時、耶蘇会の中に適当な画家を発見することが出来なかったから、この俗人画家を選んで清朝に送ったのであった。この画家は康熙帝に仕えて寵愛を賜わり、在朝すること数年、ついに望郷の念に堪えがたく、祖国のイタリーに帰去したのであった。彼は俗人であったから、北京の耶蘇会長もこの画家にたいしてはなんらの統率を加えることが出来なかった。それゆえ、在朝の耶蘇会士は、今後修道者のみを陛下に推挙することに決議した旨を復答したのであった。

乾隆帝は御前で鞠躬如として写生しているパンシの挙措を見そなわされ、態度が謹厳にすぎると運筆の自由を妨げて立派なものが描けないから、常人と考えて玉体を描けと命ぜられ、またこの画家の要求する通りの姿勢を取られることをも仰せ出された。これほど談話をつづけても、写生の妨げにならざるかと尋ねられた。ブノワは、陛下のお相手をしていると、天顔がとみに活気を呈して、清朗な聖慮が表現されるから、尊容を写生するにはかえって都合の好い次第を言上した。すると皇帝は、今

まで持たれていた書物を卓上に置かれて、ブノワと問答を始められた。パンシの写生が七時間余りにわたったので、問答もまた同じ時間だけ続いた。（次項、乾隆帝とブノワとの問答参照）またブノワが老体を押して闕下に起立しているのを御覧になり、椅子に着席せよという有難い御諚を、しばしば賜わった。正午ごろ写生を中止し零時半から続行することに決定し、パンシとブノワとは吉祥宮に帰って午餐を認めた。すると官吏が大緞一疋ずつ恩賜品として運んできた。

定刻に二人は御座所に伺候して御礼を言上し、パンシはまた写生にとりかかった。皇帝はブノワを相手に話をなさりながら、おりおり下図を御手許に運ばせて御覧になった。

乾隆帝の左の眉毛が少し中断されていたが、そばの眉毛が隙間を隠していたので、玉顔を仰いでもこの欠点には気がつかなかった。しかるに皇帝はブノワとパンシとを玉体のすぐ間近に召し寄せられ、この欠点を遠慮なく描写せよと命ぜられ、皇帝の肖像といえども、その真を写さなければ肖像たる価値がないと主張された。なお竜顔の皺を写すに方っても同様であり、写生には遠慮や阿諛の禁物であることを繰り返された。ブノワは竜顔の皺がブノワの顔の皺より少いことを奏上すると、皇帝は右手で小さい鏡を取られ、左手で御顔の皺を一々示されながら、すでに還暦の老齢に達しながら顔に皺が見当らないほど若く見えたら、かえって普通ではないと言われた。

ついにパンシは絵筆を擱いて第一回の写生を終り、絵具の乾くのを待って、第二回の写生にとりかかるべきことを言上すると、皇帝はもはや、画像が出来上ったものと考えられていたから、びっくりされたのであった。

一月三十日、ブノワとパンシとは雪を冒して吉祥宮から斎宮に伺候して写生を続行し、帽子と御服とを描き添えるはずであった。しかるに乾隆帝は新年の儀式を執行されるため、他の宮殿に出御されていた。お留守の間にパンシは扈従の全身像の素描をかき上げた。扈従の青年自身がこの素描を陛下

のもとに運んで御覧に入れると、陛下はいたって御満足であった。そして皇帝も宦官達もこの画には言葉が欠けているばかりだと褒め立てた。すると乾隆帝は全身像を要求され、今まで描いてきた半身像の上下左右に紙をたして、全身像に改めよと通達せしめられた。

中国人とくに乾隆帝は、絶対に必要なだけの陰影しか付加することを好まれなかった。また帝は御自分の髯や眉の毛が、画像に近づけば見分けられるほど一本々々細かに写生されていることを御希望であった。中国人が極度の密画を好むことについてこういう話がある。ある日、アッチレが花卉を写生していた時、偶然傍を通り合わせたカスチリョーネがこの写生図を観て、葉の枚数がモデルより一、二枚余計なことを指摘して、緻密に原物の真を描き出すのが中国画の特徴であると教えたことがあった。そして先刻、乾隆帝が髯や眉毛の精写を要求されたのも、まったくこういう中国趣味によるのであった。

しかしブノワはこういう密画は非常な時間を要するから、陛下の前で実写する必要がなく、パンシが御前を退下してからユックリ描くべき次第を申上げた。すると乾隆帝はこう言われた。

「違った考えが浮かんできた。朕が先刻申し付けた通り、最初の考えはただ半身像を描かせることであった。しかし全身像を描く方がよろしい。まず紙を準備し、その紙をこの画像のまわりに張りつけるがよい。それで画像の高さ七尺、幅四尺に改めなければならない。朕がこの通り腰かけて、前に卓子を控えて筆を持っている姿を描いてもらいたい。朕は長袍を着けよう」

そもそも洋画家の宣教師は、中国ではヨーロッパ製の画布を使用せずに、この画布と同じほど滑らかで強靱な朝鮮紙を用いていた。それゆえ半身像に紙を継ぎたして、全身像に描き改めることが可能だったのである。

また長袍は儀式用の竜服である。皇帝は御自分とほとんど同じ身長の宦官に竜服を纏わせ、パンシ

をしてこの服の竜を写生せしめられた。写生は二時間にわたったが、宦官は石像のように動かなかった。中国画家はパンシの素描を観て竜服の写生に妙手を認めたが、実写の真を欠いていることを遺憾とした。すなわち竜服の鱗の数が描き落してあった。しかし洋画は全体を芸術化すればよいので、必ずしも細部の実写に拘泥する必要はなかった。

乾隆帝は、パンシが外人であり、また新来者であり、竜服の細部に通じていないから、中国の画家に肖像全部を描かせて、パンシはこれを精細に模写して、彩色を加うべしと仰せ出された。この勅言はパンシにとっては、堪え難い侮辱であった。けれども勅言であるから絶対に実行しなければならない。ブノワはこの勅言をパンシに伝えて説得することに努力したのであった。いかほど皇帝の敬愛を集めている画家でも、しばしばかかる聖慮の豹変を期待しなければならなかった。例えばカスチリョーネはもっとも聖上の寵愛を蒙り、その技倆は真に抜群であった。やはり皇帝の心機一転に接して、同じ憂目をみたことがあった。またこの洋画家はいかほど絵画の奥儀に達していたにせよ、中国画家のように暗記力を利用して、ただ想像にまかせて下図をかいたら、とうてい成功する見込みはなかったのである。いまパンシは中国皇帝の優雅な筆の持ち方も、腕や脚の端正な姿勢にも通じていなかった。ましてやヨーロッパで礼儀正しい姿勢も、中国では無作法な姿勢であるかも知れない。ブノワはこう論じて皇帝の新しい仰せに従うことをパンシに勧めた。いかにパンシが温順な修道者であったとはいえ、一個の画家としては、今までせっかく考えついた、しかも自信のある素描を断念することは実に苦痛の極だったのである。

九　望遠鏡の説明と排気機の御前実験

一七七三年（乾隆三十七年）一月十二日、フランス耶蘇会士メリクールは時計師として、またイタ

リー耶蘇会士パンシは絵師として、北京に到着した。二人は絵画と排気機と望遠鏡そのほか数品を献上することに内定したのであった。当時フランスでは、耶蘇会の不評はなはだしく、昔日の同情者がみな耶蘇会士を敬遠し、その伝道事業に関心を失ったにもかかわらず、かねてこの伝道事業に深甚な関心を有し、したがって多大な後援を惜しまなかった国相のベルタンは、ルイ十五世と耶蘇会との間を調停して、中国伝道に従事する宣教師のために破格の恩沢を懇請しておいた。その結果、前年この新発明の望遠鏡がパリーから北京に届いたのであった。また排気機は当時の広東耶蘇会の長老ル・フェーヴル (Le Fèvre) がとくに同地から北京の耶蘇会士に回送してきたものであった。そしてブノワは北京の耶蘇会長から新来の耶蘇会士を皇帝に紹介すべきいっさいの手続を託せられた。さて新来の耶蘇会士は、拝謁前に献上品の目録を作成して、御手許に差出すのが年来の慣例であった。しかし前例によると皇帝は献上品の目録を御覧になり、御嘉納を賜う物と然らざる物とがあった。幸い御嘉納の光栄に浴した物の中にも、宮中の秘府に収められて空しく埃に埋められる名品佳什も少くはなかった。それゆえブノワは遠望鏡と排気機とがかかる悲運に際会することを虞れて、望遠鏡の価値と排気機の用途とを説明する必要があると考えた。望遠鏡についてはすでに皇帝が相当の理解を有せられているから、ブノワはその詳細な説明を省き、排気機に関してはその原理とその奇異な用法二十余種を説明し、なお墨を用いて説明図を作成し、排気機が御手許に届く前に、この図と説明書とを差出すことに決めたのであった。

しかるにその年もすでに陰暦十二月に入って御用納めとなり、官省は翌年一月二十一日まで休暇のはずであった。その休暇中、官吏は緊急事務以外には執務せず、皇帝も平常ほど国務を親裁されなかったが、宮中で行われる諸般の儀礼や観戯のためにかえって御多忙であった。それゆえ、急いで新来の宣教師を御紹介する必要があったのである。ブノワは当路の官吏と協議して陽暦一月十八日（乾隆

三十七年十二月二十六日）を御紹介の日と決定した。

ブノワは前日から献上品を運ばせておいた。また御紹介の上書は、宣教師が時刻に間に合わないといけないので、明け方から内朝に届けられている必要があるから、ブノワはこの上書と献上品目録と排気機の説明書を係の役人に頼んでおいた。なおパンシは諸種の絵画に長ずるが、その専門は肖像画にあることをも別書に認めて呈上した。その頃は非常に寒さが厳しかったので、排気機を使用するにはこの器械を温い場所に置かれたい旨を役人に頼んでおいた。翌十九日、耶蘇会長やブノワをはじめ他の宣教師が新来の宣教師と同伴した。御紹介状と他の書類は陛下の御手許に届いていた。

当日午前九時頃、内廷の官吏は皇帝が新宣教師の紹介書を一読された次第を告げて、献上品をそれぞれ内廷に運び入れた。午後、皇帝が献上品を一覧されて御意に召さないものは返却されたが、もちろんパンシの自筆画と望遠鏡と排気機は御嘉納の光栄に浴したのであった。そして新来の宣教師は画家や時計師として、如意館において服務すべきことを命ぜられ、すなわちパンシはすでに御下命のあった六枚の絵画をダマセーヌ、ポワロとともに分担すべきこと、メリクールはアルシャンジェ、ヴァンターヴォン両師とともに時計製造の業務に服すべきことを命ぜられた。また排気機は同館内に収蔵して陽春の候を俟ってブノワとシッケルバルトとが御前実験を行うことに決定した。なお恒例により新来の耶蘇会士に、おのおの絹六疋を下賜された。

さて望遠鏡についてはブノワが御説明役を仰せつかったので、彼は恐懼して御座所に出頭した。そして御居間から出てきた宦官を相手にして、望遠鏡を御座所からもっとも遠い棟上に当てがった。その日は天気快晴であり空気も澄みわたっていたから、宦官が望遠鏡を覗くと、はるかに遠い御殿の棟上がアリ〳〵と眼に映じた。宦官は大いに驚いた。折しも午後二時であり、乾隆帝は正に午餐中であったにもかかわらず、右の次第を言上した。宦官も官吏も御座所の正面玄関に卓子を据え、遠い物体

に望遠鏡を当てがって見るとやはりハッキリ見えたので、ますます望遠鏡の偉力に驚いていた。ちょうど御昼餐がすんだので、宦官は皇帝の出御を願った。皇帝は親しくこの望遠鏡を実験されて、それまでの望遠鏡よりこの望遠鏡の方がはるかに優れていることを認められた。それゆえ、御出先には必ずこの望遠鏡を携行せよと宦官二名に命じ、またブノワには、この望遠鏡の使用法を彼等に教えてこれに通暁するように教育せよと仰せられ、絹の大緞三疋を下賜されたのであった。

十九日パンシが吉祥宮で肖像を描いていた時、皇帝は塔上に登臨され、この見晴し台から望遠鏡を遠い目的物に差向けられたが、その日は靄が立ち罩めていたので、その目的物がほとんど見えなかった。この次第を望遠鏡付の宦官がブノワに伝えにきた。そもそも望遠鏡は目的物をすこぶる拡大するものであるから靄を拡大し、そのために目的物が見えないのも当然の次第であり、毫も驚くにはあたらないとブノワは説明した。

中国では天文学が農本主義の国是からもっとも重視されているので、乾隆帝もまた親しく君側の西欧学僧について斯学を研究され、その進歩にはつねに多大の注意を払われていた。実際、中国の如き大国を統治し、しかも万機を親裁されるにもかかわらず、乾隆帝が、つねに天文学を研究され、しかもこの学問にかなりの造詣を持たれていることについては、在朝宣教師が等しく驚嘆するところであった。当日ブノワは、天文現象に関して種々の御下問に接した。彼は天動説を否定して地動説を肯定するならば、この新学説からたやすく天文現象を説明出来る次第を申上げた。そして地動説を説明するのに、地球上の人間をば海上を徐走する船中の客に譬え、船客は山や海岸がはるかに遠ざかるのを見て、自分ばかり静止していると考えるのと同じことであると説明を加えた。すると乾隆帝はこう言われた。

「朕は、船に乗っている時、もしくは轎に乗っている時に、そういうことに気がついたことがある。

ことにしばらく勉強したあとで、入口の鏡か窓をチラリと眺めると、なおさらそういう感じがいちじるしい。その時、朕はじっとしているが、いろいろなものが、朕から遠ざかったり近づいたりする気がする」

かように乾隆帝は地球の自転を人間が感知しない事情を認めて、地動説を肯定されたのであった。そして帝はヨーロッパの天文学者が、みな地動説を信じているか否かを尋ねられた。ブノワは肯定的の御返辞を申上げたが、ヨーロッパの天文学者は、事実上、宇宙が彼等の推測通り装置されているとは確信していないが、地動説は星の運動を説明し、また星の運動を計算するのにもっとも適切であるのと、またもっとも便宜な理論であるから、この説を提唱するにすぎないことを付言したのであった。

乾隆帝は星の観測法に関してブノワに御下問があった。新来の耶蘇会士パンシとメリクールの献上した望遠鏡についてもふたたび質問を続けられた。この望遠鏡の下部にある反射鏡の穴が、この鏡の反射する光線の分量を減少すべき虞れなきかと問われ、またこの穴に対向する他の小反射鏡が物体の一部を陰蔽する虞れなきかと尋ねられた。この二枚の反射鏡の位置を換えてかかる欠陥を取り除く工夫なきやと訊かれた。それでブノワは、ヨーロッパ第一の天文学者ニュートンは反射鏡を数枚重ねて、皇帝のお考えと一致する望遠鏡を製作した次第を申上げ、さらにこの望遠鏡を物体に当てがうことが困難なばかりでなく、他の欠点が生ずる事をも申上げた。すると皇帝は、下部の反射鏡の中央にある穴が反射光線の分量を減少するが、その反射鏡の周囲に微小なものを当てがえば反射光線の減少量を十分補うべき原理をたやすく理解された。ブノワは両眼から小距離に置かれた針の尖端が遠方の山を少しも隠さないと同じく、小反射鏡が物体と対立しても少しも物体の形を減少しない理由を申上げた。物体から発生する光線は下部の反射鏡によって小反射鏡の上に反射され、この小反射鏡が肉眼まで光線を反射させるが、この光線は色消しの対眼レンズを通過しなければ眼に達しないことを申上げて、

この新発明の原理を進講した。この説明を聴かれると乾隆帝は、ヨーロッパ人の有する発明の才を賞讃され、ことにこの望遠鏡の新発明と、この望遠鏡が迅速に、また思うままに物体に当てがえる装置をも激賞されたのであった。そしてこの新望遠鏡がすでに数個ヨーロッパで出来上ったか否か、またその若干が中国に舶載されたか否かを問われたので、ブノワはフランスの某大臣が宣教師に同情を有し、かつ乾隆帝の宣教師にたいする殊遇に感謝しているから、新しい望遠鏡の発明を宣教師に告げてきたこと、しかしまだ初製品が手に入らない旨を通告してきたことを申上げた。けれども大臣の命令によって新望遠鏡の製作を急がせているから、やがて製作が終り次第遅くも来年中には北京に到着すべきこと、すでに大臣さえ手に入れがたき新発明の望遠鏡を常人の求められるべき理由のないことをブノワは付言したのであった。

四人の宦官は勅命により排気機の用法をブノワから学んで、ようやくその法を会得するにいたった。当時、時計の製造に従事していた耶蘇会士アルシャンジェとヴァンターヴォンとメリクールとは、排気機を解体してその部分品を一々陳列しておいた。ついに排気機の実験天覧のため、三月十日乾隆帝が如意館に出御の趣を宦官から通達された。それゆえブノワは天覧の準備を整えんとして、当日は早朝から如意館に出仕して空気の圧搾、膨脹をはじめ、その他の特性に関する種々の実験を宦官に練習させた。午後、皇帝は如意館に臨御され、ブノワにたいして各種の実験を求められた。なお排気機の内部装置を天覧されたい御希望を述べられたので、ブノワは以前御手許に差しだしておいた説明図に基づいて、内部装置を解体して御説明申上げた。皇帝は翌日もまた今日の順序通り実験を行えよと命ぜられた。そして御居間に御引取りの後、宦官に命じて如意館から排気機を取りよせ、御前で前と同じ実験を行わしめられた。

翌三月十一日ブノワが如意館に到着すると、宦官は昨日御前で行った実験の経過を告げ、また皇帝

から御質問に接しても解答の出来なかった問題の内容を伝えた。ブノワは新しい実験を準備せよと皇帝から仰せつかっていたので、宦官を使って排気機の装置を解体することが必要であると考えた。それで排気機を分解したあとでふたたび組立ててみると、装置が完全な状態にあることが解った。

午後、皇帝が如意館に出御された。その時ブノワは排気機の上弁、下弁、ピストン、活栓の作用について説明した。皇帝はピストンを揚げると上弁がピストンを圧して、外界の空気がポンプの胴体に入り込むのを妨げること、これに反して胴内の空気は外界に流出しようとして膨脹し、そのために下弁が開くこと、またこの空気はピストンを揚げるためにポンプの胴内に生じていた真空の中で膨脹することを、ほどなく理解された。同様にピストンを下げるとすでに鐘内からポンプの胴内に入り込んでいた空気が脱出しようとして上弁を持ち揚げること、これに反して下弁が空気の鐘内に戻るのを阻止することを理解されたのであった。皇帝は排気機を構成する各装置の機能について質問されたあとで、それを元通り組立てれば、また実験を行うことが出来るかとお尋ねになった。ブノワはポンプの内部を御覧に供えるために、ポンプをはずしておいたが、このポンプをふたたび取りつけさえすれば、同じ実験を行いうること、それにはかなり注意と時間とを要する次第を申上げた。

皇帝は、ブノワが排気機を組立てている間、館内を漫歩されながら、画家の画技を見そなわし、いつもの通り種々彼等に御下問を発せられていた。そのうちに排気機が組み立てられたから、ブノワは御前で二十一種の実験を行った。最初の六種は空気の圧力に関する実験であった。そして最初の実験を行うと、皇帝はすでにその原理を会得されていたから、次の実験を御自身で説明されて御満足の体であった。

排気機の実験に先立って、ブノワは晴雨計と寒暖計とを如意館に持参しておいた。皇帝は晴雨計の管中で気圧が水銀を持ちあげたり、水銀を吸い上げたりする原理、また気圧の変化する原因、さらに

水銀柱の高さによって気圧の変化が認められる理由を言上し、この実験は天気の晴否によって気圧の変化を証明するとはいえ、この変化を説明すべき理由が未だ正確を欠く事情も説明申上げたのであった。次いで排気機によって空気の圧力と膨張とを証明する実験を御覧に供した。乾隆帝は、しごく御満足の体に拝せられた。皇帝は長い間、排気機の側に立たれて寸時も側を離れ給わなかったが、とうとうお居間に引き取られた。それから排気機をお居間に運び入れよと仰せ出された。

ブノワは排気機にたいして「空気実験を行うポンプ」という意味を逐語訳して、「験気筒」という漢字を使用しておいた。しかるに翌日ブノワが如意館に出頭すると、験気筒の「験」を「候」に代えて「候気筒」と改名せよという勅命を見いだした。「候」という漢字は天文現象のみならず、四季の農事を規定するために使用され、古典にも出ているから、「験」という漢字よりはるかに高尚であるというのが皇帝の論拠であった。かくて現在、用いられている「候気筒」という名称は、乾隆帝の欽定にかかるものである。

乾隆帝は排気機の実験に非常な興味を感ぜられたので、皇妃や貴嬪にもこの実験を観覧せしめて、西欧科学の奇観をともにしようと考えられた。それでブノワは後宮に参殿してふたたび実験を繰り返し、詳しい説明を加えなければならなかった。皇帝はますます実験に興味を覚えられて、他の実験を求められた。ブノワは今まで天覧に供えた実験がもっとも面白いものであり、他の実験があるにしても、その実験は前の実験の応用にすぎず、したがって他の実験は前の実験から説明されるべきことを奉答した。ついに皇帝は排気機をお居間に運ばしめられ、それから西洋の美術品を収蔵する西洋楼にこの排気機を収められたのであった。

かように乾隆帝ははじめて排気機を御覧になり、その実験に科学的感興を覚えられたから、この物理器械を献上したメリクールとパンシにも、また御説明役を勤めたブノワにも絹の大緞を一疋ずつ下

賜された。

十　耶蘇会の解散と北京の耶蘇会士

耶蘇会はその設立主旨から見ても、教会と教皇権の保護とをもって自任していた。この〈修道会〉(補注二)はヨーロッパ諸市に多数の学校を経営して、青年子弟の教育に従事していた。いくたの〈修道会〉の中で耶蘇会士がもっとも学殖に富んでいたから、耶蘇会付属の学校がもっとも盛況を呈していた。ことに耶蘇会は諸国の君主に聴罪師を供給していたので、この〈修道会〉は朝廷の内部に多大の勢力を扶植(ふしょく)していた。したがってカトリック教と教皇権とに反感を有する人達は、この見地から観て耶蘇会の跋扈(ばっこ)を憎み、この〈修道会〉の勢力に嫉妬を感じていた。そして十八世紀の後半にいたると、ブールボン系統の支配していた南欧の朝廷において、国王の権力は漸次減退して、大臣が政治の実権を握るにいたった。彼等は耶蘇会僧侶の勢力を覆滅して、彼等を政治から放逐しようと図ったのである。この運動はまずポルトガルから始まった。ジョゼッフ二世の宰相であったポンバル侯(Marquis de Pombal)は、つねに耶蘇会士が国王に接近して政治に干渉することを憎み、折あらば朝廷から彼等を駆逐しようと考えて、その機会を窺(うかが)っていた。たまたまポルトガル国王を暗殺せんとする事件が起った。するとポンバル侯は、耶蘇会士がこの陰謀に加担していると称して、耶蘇会に熱烈な非難を浴びせかけた。ついに一七五九年、数名の耶蘇会士を禁錮し、残余のものをことごとく国外に放逐したのである。

フランスにおいても、耶蘇会が国王はじめ貴人貴女に聴罪師を供して、朝廷に勢力を占めていたから、宮臣諸侯の反感と嫉妬とを買っていた。ことに耶蘇会士の道徳は俗気芬々(ふんぷん)として、臨機応変の弾

力性に富んでいた。ゆえに厳格主義を奉ずるジャンセニスト会は激烈な非難を耶蘇会に浴びせかけた。かのパスカルが「耶蘇会師父の道徳と政策とを論ずる書簡」(Lettres écrites par Louis de Mantalte à un provincial de ses amis et aux RR. PP. Jésuites sur la morale et la politique de ces Pères, 1656.) を発表して、耶蘇会攻撃の急先鋒に立ったことは有名な話である。まったく耶蘇会は各地の法院、フランス教会独立主義者、革新哲学者、百科全書家を敵としなければならなかった。なかんずく、百科全書家は耶蘇会士が諸国の君主の腹心となり、いっさいの政治的策動や陰謀に参加することをあげ、かつ遠地伝道の美名にかくれて侵略主義の手先を務めることを難詰した。また貴族界の大立物ショワズー (Choiseul) 大臣とルイ十五世の寵妃ポンパドゥール侯爵夫人は、日頃耶蘇会に反感を懐いていたから、耶蘇会の攻撃者に声援を送っていた。ことにポンパドゥール夫人はルイ十五世の聴罪師ペリソー (Le P. Périsseau) から国王に讒訴されて、君側から遠ざけられたことを深く怨んでいた。

ついに機会が生じた。フランスの耶蘇会士ラ・ヴァレット (Le P. La Valette) は、マルチニック島で商館を経営していた。しかしこの商館は英仏戦争の影響を被って破産するにいたった。商館の出資者であったマルセーユ商人は資本が回収不能に陥ったので、耶蘇会そのものに罪を転嫁して、この〔修道会〕の不正不徳を論難した。しかるに耶蘇会は一会員の行為に関して責任を負うことが出来ないと放言したから、ついに耶蘇会は出資者によってマルセーユ法院、ついでパリー法院に訴えられて有罪の宣告を受けるにいたった。そして両法院は耶蘇会の会憲を調査し、この会憲が国法に抵触することを挙げて会憲の訂正を要求した。ところが耶蘇会の総長リッチ師 (Le P. Ricci) は会憲の訂正を拒んだ。ゆえにマルセーユ法院とパリー法院とは、一七六二年耶蘇会の廃止を命じ、この〔修道会〕に属する僧侶にはたんなる個人として国内に住居することを許可した。二年後フランス国王はパリー法院の判決を承認した。

当時スペイン、シシリー、パルム公国はブールボン家が支配していた。この三国はローマ教皇クレメント十三世の警告にもかかわらず、耶蘇会士を国内から追放した。しかしフランス朝廷とスペイン朝廷とは、ただこれだけで満足しなかった。たまたまローマ教皇クレメント十三世が逝去したので、両朝廷は教皇庁に運動してフランシスコ会のローラン・ガンガネリー (Laurent Ganganelli) を次代の教皇に選出せしめた。これがクレメント十四世である。フランス、スペインの朝廷は耶蘇会の解散を遂行するために、新教皇を即位せしめたのであった。しかしクレメント十四世は即位して見ると、周囲の事情に囚われて耶蘇会の解散を断行することが出来なかった。ついに新教皇はフランス、ポルトガルその他諸国の圧迫に屈して、一七七三年、耶蘇会廃止の親書に署名した。かくて耶蘇会士はいたる処から追放され、カトリック教の敵であった新教国王プロシャのフレデリック二世またはギリシャ教会に属するロシヤ女帝カゼリーヌ二世の許に亡命したのであった。

耶蘇会廃止の悲報は一年を経て一七七四年（乾隆三十九年）北京に達した。在京の耶蘇会士が折々この風聞を耳にしたこともあったが、まさか本当とは考えられなかった。この公報に接すると彼等は悲痛に沈んで、ただ、顔と顔を見合わせるばかりであった。マテオ・リッチ以来、北京をはじめ諸省に殉教の血を流した伝道事業も、一朝にして耶蘇会の手から奪われたのである。中国伝道に従事しているものは耶蘇会ばかりではない。ドミニコ会、フランシスコ会、海外伝道会も、耶蘇会からはるか遅れて伝道僧を中国に送ってきた。とはいえ中国開教の光栄は、耶蘇会に帰するのである。ことに伝道の実績からみても、北京の朝廷に寄与した功績からみても、耶蘇会に及ぶものはない。なかんずく、歴代皇帝の信寵は耶蘇会士の擅断するところであった。中国の如き専制国家においては、皇帝の信寵があればこそ布教の実績を挙げることが出来たのである。ゆえに耶蘇会の廃止は、中国の伝道事業に終止符を打ったと同じである。なお個人的見地から言えば、耶蘇会士は〔修道会〕を失ったと同時に

全く帰趨を失ったのである。いまさら他の〔修道会〕に入会することは出来ない。彼等は還俗するより他に道がなかったのである。耶蘇会士によって天主教に帰依した中国教徒も、牧師を失ってふたたび「迷える羊」に立ちかえったのである。

在京の耶蘇会士は、これを思い、あれを思うと泣くより他はなかった。実際、彼等は手を取り合ってしばらく泣いていたのである。当時、北京に滞在していたフランス耶蘇会士は左の十名であった。

ブノア、アミヨー、ドリエール (J-F-Marie-Diendonn d'Ollières 方守義)、シボー (Pièrre-Martial Cibot 韓国英)、ヴァンターヴォン、ブールジョワ (François Bourgeois 晁俊秀)、コラス (Jean-Paul-Louis Collas 金済時)、グラモン (Jean Joseph de Gramont)、ポワロ (Louis de Poirot)、バンシ (イタリー人)。

耶蘇会が廃止されたので、その会堂も資産も教皇直属の海外伝道会に移管されることが規定された。ゆえに海外伝道会の宣教師は、ずかずか、フランス会堂すなわち北堂に入り込んで、我が物顔に振舞った。フランス耶蘇会士はこの体を見るに忍びなかった。ことにフランス王室の紋章、百合の花を散らした会堂、書庫、その他の器具が海外伝道会のイタリー人、ドイツ人らの手に渡るかと思うと断腸の感に堪えなかった。

しかし耶蘇会士の間にも意見の分裂が生じた。フランス伝道団のヴァンターヴォン、グラモン、ポワロ三師およびポルトガル伝道団のシポラ、ダロシャの二師は教皇親書の指令に服従し、この親書が北京の朝廷に通告されるのを待たずして、潔く海外伝道会に合流しようと主張した。しかし他の耶蘇会士は海外伝道会と合流して、他会の掣肘を受けることを肯んじなかったから、合流派の主張に反対した。

当時フランス会堂長はブールジョワであった。彼は老齢に達して、考え方が固定的であり一方的であった。ことに、その専制的な態度が事態を悪化した。

反対派は教皇の親書が公布されて、北京の耶蘇会が廃止される時には生計の独立を必要とするので、当面の危急を救うために、北堂の財産全部を頭割に分配するか、もしくは一定金額の配当にあずからんことを要求した。もちろんブールジョワは言下に頭割説を否定したが、配当説には賛成した。かくて会士はおのおの千テールの配当金を受取った。フランス耶蘇会士ヴァンターヴォン、グラモン、ポワロの三師は還俗したが、いぜんとして北堂に住居していた。しかしながら彼等の生活費は、それぞれ独立していた。

かくの如く耶蘇会士の間に醜い意見の対立があったばかりでなく、他の〔修道会〕とも教権上の闘争が行われたのである。

北京の司教スーザ (Sousa) は、すでに一七五七年五月二十六日逝去したので、規定により南京の司教レンベックホーヴェン (Laimbeckhoven) が北京の教区を兼摂していた。そのために彼は同僚の反感を買って、多くの同信を敵としなければならなかった。

ローマ教皇庁は耶蘇会廃止に関する教皇親書を公布せんがために、レンベックホーヴェンに北京副司祭(補佐司教)〔司教代理〕と自称せよと命じてきた。しかし古来の規定により、ローマ教皇の教書にしろ、その親書にしろ、ポルトガル国王の協賛がなければ、これをポルトガルの勢力範囲に送ることが出来ない。また、ポルトガル人もしくはポルトガルへの帰化人でなければ、ポルトガルの勢力圏内においては、ローマ教皇は何人にも僧位を授け、もしくは何人をも僧職に任命することが出来ない。この規定のためにレンベックホーヴェン司教は大いに困惑し、ポルトガル朝廷の機嫌を害することなく、ローマ教皇庁の命令に服従せんがためにカルメル教団のジョゼッフ・ド・サント・テレーズ (Le P. Joseph de Sainte Thérèse) を北京の〔司教代理〕に任じた。

北京のポルトガル伝道団に属する耶蘇会士は、ポルトガル国王の同意なしに北京の〔司教代理〕が

任命されたことに憤激し、この事情を澳門の司教に通告した。

澳門の司教シルヴァ(Sylva)はこの通達を受理し、北京司教区は澳門司教区の分区であると主張して、この理由のもとに南京の司教レンベックホーヴェンから北京の行政権を剝奪し、当時、欽天監監員でありポルトガル伝道団長であったデスピナを北京の〔司教代理〕に任じ、この旨をフランス伝道団とポルトガル伝道団とに通告すべきことを命じた。

フランス耶蘇会士と海外伝道会員の多数とは、南京の司教に忠誠を誓い、この司教から諸種の権限を授けられていたから、もちろんこの司教を正統なものと認めていた。しかるにポルトガル耶蘇会士はダロシャ一人を除き、南京の司教を正統なものと認めず、澳門の司教を正統な司教と認めていた。それで北京の司教管区が二派に分裂したのである。ゆえに一七七五年九月二十二日、デスピナがフランス会堂に出頭して、公式に耶蘇会廃止の教皇親書を通告した時、ブールジョワは彼を〔司教代理〕と認めず、たんなる一個人の通告と見做す旨を彼の眼前で言明した。デスピナ〔司教代理〕は一言も答えず、憤然として北堂から退出した。そしてジョゼッフ師がレンベックホーヴェンの代理者として、フランス耶蘇会士に教皇の親書を通告に来たのは、同年十一月十五日のことであった。

レンベックホーヴェンはローマ教皇庁に愁訴して十九年間、北京司教区の行政に方っていたが、自分は北京司教であったが、また澳門司教の主張する如く、その傀儡であったかを反問した。

ローマ教皇庁は南京の司教こそ正統な北京司教であると明答し、したがって澳門司教およびデスピナの行動はことごとく無効であり、要するにジョゼッフこそ北京の司教であると宣言した。そしてデスピナにたいしては〔司教代理〕の行動を停止すべきことを忠告し、この勧告に従わない時には、相当の制裁を加うべきことを付言した。

フランス耶蘇会士が、北堂の財産を一定額だけ分配したことは前述の通りである。しかし、まだ多

額の資産や財産が遺っていた。その分配問題に関しては耶蘇会の後継者と指定されていた海外伝道会とフランス耶蘇会士との間に争議を醸したばかりでなく、耶蘇会同信の間にも醜い紛議が発生したのである。

クレメント十四世の耶蘇会廃止に関する親書の付帯指令によると、フランス伝道部の財産は全部、教皇に帰属するはずであった。ゆえに北京の海外伝道会は同会が教皇に直属する理由をもって、この財産の譲渡を主張していた。教皇の指令を承知していた海外伝道会のジョゼッフ(補注二)は、フランス耶蘇会伝道団にたいして北堂の財産管理を要求し、少くともこの財産が教皇に帰属することを承認せしめようと欲した。ところがフランス耶蘇会士は、この要求に関しても、また自堂の財産が教皇に帰属することについても抗議を提出した。彼等は、㈠フランス会堂の資産はフランス国王および中国皇帝の下賜品であるから、両君主の承認がなければ随意に処分しえないこと、㈡両君主の下賜品の中には、フランス人として下賜されたものと耶蘇会の宣教師として下賜されたものとの区別があること、㈢フランス会堂は耶蘇会の教会というよりはむしろフランス人の教会であること――以上の三件を抗議の理由としたのであった。

とにかくフランス教会の管理については容易に意見が纏まらず、空しく時日が経過していった。

フランス耶蘇会長アミョーは北堂の財産処分に関する紛議に関し、フランス国相ベルタンに委細の事情を具申して、その指令を求めた。するとベルタンはアミョーの書簡をルイ十六世に示して聖断を仰いだ。新国王はこの問題には深甚な関心を懐いていたから、自国耶蘇会士の窮境に同情し、国家的見地に立って次の如き決裁を下した。㈠北京の耶蘇会士を同会廃止前の状態に還元して、彼等自身をして北堂の資産を管理せしめること、㈡彼等をして澳門の司教と南京の司教とから独立せしめること。

さらにルイ十六世はルイ十五世と同じく、北京の耶蘇会士一名にたいしてこれまで年金一万二千フ

ランを下賜されてきたが、同額の下賜を継続されるばかりでなく、次第によっては増額することも承諾されたのであった。そしてこの国王は一七七六年（乾隆四十一年）ブールジョワを北堂の資産管理人に任命したのである。

しかし前記の還俗会士ヴァンターヴォン、グラモン、ポワロの三名は、ルイ十六世の命令はローマ教皇クレメント十四世の意志に反するものと認めて、国王の命令書に署名することを拒んだ。そして彼等は下記の理由を主張した。ルイ十四世とルイ十五世とがフランス耶蘇会の北京伝道団にたいして、いくたの物品や資金を寄進されたことは事実に違いない。これらの下賜品と下賜金とはいったん伝道団に寄進されるや否や耶蘇会の資産に帰してしまったのである。したがって寄進者はもはや所有権を持たない。寄進者の国王がさながら所有権を有するかの如く、フランス会堂の財産について処分を命ぜられることは、論理上不当の処置と言わなければならない。そしてこの主張は海外伝道会の主張と合致していた。

また還俗者三名は、フランス国王がブールジョワをフランス伝道団の資金管理人に任用したことが不満であった。彼等の見る所によれば、ブールジョワは生来頑迷な人物であり、一度管理人に任用されるとますます驕慢な態度を示して毫も他人の意志を尊重しなかった。実際この〔修道会〕を通じて彼ほど傲慢不遜な人物は、その例を見なかったのである。ことにブールジョワはドリエール、コラス、シボーの三師と結託し、他の会士の正当な反対理由を無視し、勝手にフランス伝道団の資産を処分し、はなはだしきにいたってはポルトガル伝道団と款を通じて、北堂の資産を奪取すべしとポルトガル伝道団に勧めているのである。なおポワロの如きは、フランス朝廷があくまでブールジョワを信用して、彼をフランス会堂の資産管理人に任じておくならば、ブールジョワとその一味の非を乾隆帝に訴えて聖断を仰ごうと考えたのである。彼等はルイ十六世を国王と仰いでいるにせよ、彼等の進退は中国皇

帝に依存しているから、袞竜の袖に縋ってあくまで北京に滞在をつづけたかったのである。

かくの如き醜状を繰返すだけで、フランス会堂の資産処分問題はなかなか解決しなかった。

一七七五年（乾隆四十年）二月十三日早朝、南堂すなわちポルトガル耶蘇会士の教会においては、当時クレメント十四世のために、サン・タンジュ城に収檻されていた耶蘇会総長の伯母カテリーヌ・リッチの祭儀をおごそかに執行していた。するとキナ臭い香がしてきたので、会衆は方々堂内を調べてみた。しかし火も煙も見当らなかった。たぶん、外からキナ臭い香がしてきたのだと考えて、会衆は安心して祭式を終り、一同退出した。そして会堂の扉を締めてから一時間ばかりたつと、「火事だ。火事だ」という叫び声が諸方から聞えて、焔と煙の渦巻が会堂の窓から吹き出していた。会堂の会計係が「聖体」を取り出そうとして火の中に飛び込んだが、煙に巻かれて仰向けに倒れた。幸い下僕が駈けつけてきたので、彼は九死に一生を得た。もちろん「聖体」を取り出すことは出来なかった。そして一時間もかからずに、会堂は烏有に帰したのであった。この猛火によって、先年康熙帝の賜わった御筆の匾額を三種とも焼失した。かかる過失を犯せば、中国では極刑を免れなかった。それゆえ、宣教師は恐懼措く処を知らず、さっそく拝謁を願い、御前に平伏して陛下の御慈悲を願った。

乾隆帝は微笑をもって宣教師の陳謝を聞かれた。そして会堂を焼失した彼等の不幸を憐み、以前、同教会の焼失した時、康熙帝が一万テールを寄進された前例に従って、同額の巨金を下賜された。その上康熙帝御筆通りの辞句を新たに朱筆で揮毫された。しかし「万有真元」は「万有真原」と書き改められた。

宣教師をはじめ教徒は、乾隆帝の恩賜に感激した。彼等はこの聖恩に浴して、乾隆帝の天主教にたいする態度が軟化したことを認め、ひそかに祝辞を交換するものさえあった。

新築の工事が盛大に開始された。ポルトガル耶蘇会士は〔修道会〕そのものが廃止されたので、後

継者のないことを知っていたが、宗光遍照のために全力を尽して教会の竣工を急いだのであった。

当時、乾隆帝はようやく老齢に達し、政治にもやや倦怠を感ぜられていた。天主教にたいしても、寛仁な態度を示された。先年、第四次迫害が発生した時も、皇帝の仁慈によりわずか半年で迫害は終熄した。また韃靼地方には天主教伝道が厳禁されていたにもかかわらず、中国人の伝道師が布教したので、迫害が起った時にも、帝は中国教徒が国法を犯した事実を不問に付せられた。

当時は「四庫全書」の編纂事業が緒についた時であった。乾隆帝は翰林院学士と熟議して、耶蘇会士の漢述した左の四書を「四庫全書」の中に加えられた。

㈠マテオ・リッチ著「天主実義」、㈡ヂャーズ（Diaz 陽瑪諾）著「軽世金書」、㈢フェルビースト著「教要序論」、㈣パントジャ（Pantoja 龐廸我）著「七克」。

かつて康熙帝は「教要序論」の文章が卑俗に堕することを笑われた。なぜと言えば、著者のフェルビーストは、この書が一般人の伝道を目的としていることを考えて、意味の晦渋を恐れ、とくに貴族的な文章を避けたからであった。しかし乾隆帝は文章の卑俗を顧みられず、その論法の正確なことを重んじてこの書を「四庫全書」の中に収められたのである。前掲の四書はことごとく天主教要理の説明書である。それにもかかわらず乾隆帝は「四庫全書」の中に加えしめられたことは、この皇帝の天主教にたいする態度を明示するものであり、換言すれば中国皇帝が西教の価値を認められたことに他ならなかった。

ローマ教皇とポルトガル女王とはようやく妥協点を見いだして、海外伝道会所属北京在住のダマセーヌを挙げて、北京の司教とすることに意見の一致を見たのである。ダマセーヌは画技に長じ、「得勝図」の一部を分担したことは前述の通りである。彼はポルトガル人ではない。要するにポルトガル女王は教皇の懇請に屈して、ポルトガルの国籍を持たない司教を北京に任命することを承諾しなけれ

ばならなかった。

かくて一七七九年（乾隆四十四年）二月四日、ダマセーヌはローマの一枢機卿から、北京司教に任命されたことを、個人の資格で通達された。またローマの教皇庁から同じ通告に接した。しかし教皇の辞令書は彼の許に到着しなかった。するとフランス耶蘇会士またはポルトガル耶蘇会士が教皇の辞令を途中で横奪したという風聞が伝えられだしたのである。

他方、南京の司教であり北京の司教を兼ねていたレンベックホーヴェンは、ダマセーヌが教皇から北京の司教に任ぜられたと聞いて辞任を申出た。もしこの辞意が実現した場合に、教皇の辞令が到着しなければ、ダマセーヌは北京の司教に就職することが出来ない。ゆえに北京の教会には会長がなくなり牧師がなくなる訳である。こういう事態は一刻も放任して置くことが出来ない。教皇の辞令が北京に到着しないでも、ダマセーヌの許に届けられた責任者の書信から見て、彼が北京の司教に任命されたことは疑いの余地がない。したがって授任式を断行することが必要である。それゆえ、辞令の到着を待たずして、任命式を挙ぐべきか否かについて宣教師の意見を徴すると、宣教師二十六名の中で、可とするもの十二名、否とするもの十四名であった。

しかし賛成派は、㈠ローマ教皇の辞令書が中国に到着中紛失し、あるいは盗まれたにしろ、他の重要信書によっても、ダマセーヌが北京の司教に任命されたことは疑いを容れないこと、㈡すでに任命式執行のために山西省からビュルジェル（Bulger）師が北京に到着していること、㈢師は任地を永く留守にしがたきことを主張して、ダマセーヌの司教叙任式を挙行すること、に決定した。もちろん、反対派は種々の理由を挙げて抗論を試みたが、賛成派は毫も耳をかさなかった。かくて賛成派は一七七九年（乾隆四十四年）四月二日、西堂で叙任式を執行し、ダマセーヌを北京の司教に推戴したのである。もちろん、反対派はこの資格を認めなかった。それで司教ダマセーヌは、最後の手段に訴え、

反対派の頭目ドリエール、デスピナ、シタデラ（Cittadella）に破門を宣告した。

北京教会の分裂と紛議とは宣教師自体の慾心から発したものにせよ、これほどまで極端な闘争に進展するにいたっては、さすがに彼等も良心の呵責を感じたのであった。

一七八〇年八月八日、シボーは逝去した。そして破門の極刑を通告されたドリエールは同年十二月二十四日、脳溢血で急逝した。ドリエールの急逝に驚いて悲痛に沈んでいたスコラは翌年正月二十二日、亡友のあとを追った。かくて北堂にはアミョー、ブールジョワの二師が孤影悄然として反対派の孤塁を守っていた。

かくの如く北京の司教問題に関しても意見の対立を見たと同時に、北堂の資産処分問題についても異見がますます激化した。ダマセーヌが北京の司教に就任すると、北堂の資産を海外伝道会に併合することを提議した。ブールジョワは真先にこの提案を排斥し、ポワロ、ヴァンターヴォン、グラモンの三師は乾隆帝に訴えて親裁を仰いだ。帝はある大官に命じて居中調停を図らしめた。この大官の調査によると、次の事実が解った。ブールジョワはフランス国王ルイ十六世によって北堂の俗務管理人に任命されたものであり、その辞令を所有している。しかるにヴァンターヴォンはこの辞令書には信頼すべき証明が欠けていると主張して、彼自身も教皇によって北堂の俗務管理人すなわち会計係に任命されたから、即時この重責を履行しなければならないと宣言している。しかし、中国人はヨーロッパの慣習にも国語にも通じていないから、事の正否を決定することが出来ない。よろしく陛下は、ブールジョワ、ヴァンターヴォン両師を呼び出し、各人一年ごとに交代する制度を設けて、会堂を管理すべきことを命ぜられるべきであると、この大官は乾隆帝に復奏した。

乾隆帝はフランス耶蘇会士を全部朝廷に呼び出して、抽籤によって各人一年交代で北堂を管理せよと命ぜられた。さすがの宣教師も、この勅命に従わなければならなかった。当籤者はグラモンであった。彼はまず今まで西堂に住んでいたダマセーヌにたいして、北堂に転住すべきことを命じた。そしてヴァンターヴォン、ポワロ両師と会議の上、フランス会堂の有する六〇〇〇テールを分配することに決した。彼は会計係として一六〇〇テールの分配を受けた。過去にたいする賠償として、彼とヴァンターヴォンとポワロの三人で五〇〇テールを受領した。他の四〇〇〇テールを耶蘇会士全部に分配し、一人が六五〇テールの配当にあずかった。

かくて、長い間醜い闘争をつづけてきた北堂の財産問題も、ようやく終結を告げたのである。

しかし北京司教の問題はなかなか解決しなかった。ブールジョワはダマセーヌの叙任式が違法であり、その権限は無効であることをゴアの大司教に訴えた。またデスピナはインドの首席司教にたいし、ポルトガル伝道団の宣教師を代表して、自派の行動を弁明した。大司教はデスピナと同意見であったから、教皇の辞令とポルトガル女王の親書とが北京に到着するまで、ダマセーヌは北京司教の地位に就くことを差し控うべきであったと返信した。デスピナはダマセーヌに大司教の意志を手紙で伝えた。そしてダマセーヌはこの通告に接するとひどく感動し、たちまち脳溢血を発して急逝したのであった。

ポルトガル女王は、ダマセーヌ急逝の報に接すると、ローマ教皇庁にたいして、アレキサンドル・ド・グーヴェヤ（Alexendre de Gouvéa）を後任に推挙した。このグーヴェヤはポルトガル人であった。教皇は女王の推薦を認めてこのポルトガル僧侶を北京の司教に任命した。グーヴェヤはただちにリスボンから出発し、途次ゴアと澳門に立ち寄って当局の諒解を求め、一七八五年（乾隆五十年）一月十八日、北京に到着した。

北京の宣教師は一日千秋の思いで、グーヴェヤ司教の到着を待っていた。彼等の胸中にはおのおの思い思いの感情が漲っていた。実際、司教の到着した時、各方面から中傷、口論、讒訴の声が新司教の耳を驚かしたのであった。宣教師は敵派にたいして、復讐と処罰とをグーヴェヤ新司教に求めて已

まなかった。新司教は、兄弟親睦の大教義を忘れて、北京の宣教師が同僚の復讐に狂奔する醜状を見て、ただ、呆れ返るばかりであった。

しかし新司教は、前任者ダマセーヌが海外伝道会の宣教師に使嗾されて反対派の僧侶に破門の極刑を加えたことを不穏当と認めて、即座にこの刑罰を撤回した。同時に今まで非難を招いていた宣教師に、痛悔の謹慎を命じた。新任司教は公明正大に恩威を示したので、さすがの宣教師も良心の声を聞いて、自己の非行を恥じた。その結果宣教師の間に、ようやく平和が成立した。新司教はルイ十六世とローマ教皇との諒解を求め、フランス耶蘇会士の後任として、フランス、ラザリスト会の宣教師三名を北堂に迎えた。またポルトガル同派の宣教師が北京に着任して、ポルトガルの伝道団を管理することになった。

かくてマテオ・リッチが北京に開教して以来百八十四年を経て、北京の耶蘇会は廃滅し、その伝道事業はラザリスト会に継承されたのである。

前述の通り、宣教師から観れば、伝道の実績をあげることが第一であり、西洋の科学文化をもって中国皇帝に奉仕することは第二義であった。換言すれば、第一義の実現を見んがために第二義の手段に訴えたのである。

しかし中国皇帝から観れば西洋文明の漢土移植もしくはこの文明にたいする享楽が第一義であり、天主教の宣伝は全然第二義に属し、むしろ「有りがた迷惑」であった。それどころか、中国皇帝から考えれば、宣教師のいわゆる「福音宣伝」は民心を惑乱して国乱を醸成すべき動因だったのである。ゆえに明朝も清朝も、天主教とともにその伝道僧を国内から駆逐したかったのである。しかし彼等の有する天文知識と器械技術とは、古来の農本政策上、また時計の製造もしくは修繕上、中国には絶対

に必要であった。ましてや製砲にしろ製図にしろ、宣教師の知識と技能とにまたなければ、中国人はかかる科学的利器を造ることが出来なかった。ことに清露の外交関係が頻繁を加えるに方って、宣教師の語学知識に依存しなければ彼我の国家意志を通ずることが出来なかった。ゆえに雍正帝はフランス耶蘇会士と協議して、北京にラテン語の学校を建設し、とくに満洲青年をラテン語の翻訳官に養成しようと図った。そして初代の校長はフランス耶蘇会士パールナンであり、次代の校長も同じくゴビールであった。雍正帝は天主教と宣教師との弊害を認めていたにもかかわらず、在京の耶蘇会士に、天文学者、美術工芸家、ラテン語学者として滞京を許し、異教の伝道僧を全面的に中国本土から追放することが出来なかった。この事実は、中国文明が西洋の近代文明と接触するや、科学的、芸術的、語学的方面において被いがたい欠陥を暴露し、したがってこの「西夷文明」の前にかえって跪伏し、叩頭したことを証明するものである。

宣教師も彼等の知識や技術がいかほど中国朝廷において必要であるかを認めて、自己の存在理由もしくは存在権を主張している。

> 「在朝の宣教師にたいする支那人の行動から批判すれば、宣教師は万有学者でなければならない。皇帝の宝蔵に用途も名前も解らない器械や器具や鉱石や、また二、三の薬品があるならば、彼等は宣教師に呼びかけて、その用法や名前を教わろうとする。もしこれまで知られていない珍品奇什を世界のある国から運んでくるならば、皇帝御用のフランス人もしくは宣教師という資格が、いっさいの異邦物に関する知識の看板であるかの如く、宣教師は支那の官人に教えなければならないのである」(Lettre du P. Amiot au P. de la Tour. A Pékin, le 17 octobre 1754.)

清朝は漢民族ではない。ゆえに漢民族に特有な排外思想、攘夷主義、鎖国主義を漢民族ほど強烈に、もしくは濃厚に持ち合わせていないことは明らかである。ことに文化の低劣な清朝は漢文化を踏襲し

たのである。したがって西洋文化を輸入することについては、清朝は漢民族ほど苦痛を感じていなかったであろう。清朝は漢文化を踏襲して、まず漢民族の前に降った。ついで西洋科学文化の軍門にも降ったのである。

前述の通り、康熙帝は国家的必要と個人的興味という二観点から、西洋文化を尊重してその利用に努めた。その結果、宣教師に恩待を加え、周囲の反対を押し切って、天主教の信仰を国民に公許した。しかし雍正帝は西洋文化にたいして、ほとんど興味を持たなかったし、帝は道教の篤信者であったから、天主教を禁止し在京の宣教師を除いて他の宣教師に退去を命じた。乾隆帝は康熙帝を施政上の典型、趣味上の書式と仰いで、この名天子に則ることを生活指針としていた。また遺伝的にも康熙帝の血液が、乾隆帝の脈管に流れていたことは言うまでもない。それゆえ、乾隆帝は公平に西洋文明の価値を認めて、ある部門において中華文明が西欧文明に劣ることを廷臣の前で公言されていた。

「皇帝は天文学、絵画、科学、技術の見地に立って、支那人と西洋人とを比較すれば支那人は子供にすぎないと言われていた」(Lettre du P. Cibot au P.D……A Pékin, le 3 novembre 1771.)

かくて乾隆帝は利用厚生の見地から、西洋天文学の運用に努めると同時に、個人的趣味の観点から西洋の芸術文化を享楽されていた。ある耶蘇会士は帝の西洋趣味にたいして次の如き批判を加えている。

「この皇帝の趣味は言わば四季の如く変った。昨日は音楽と噴水とを好まれ、今日は器械と建築とを好まれた。しかし絵画にたいする趣味だけは少しも変らなかった」(Lettre du P. Amiot au P. de la Tour. A Pékin, le 17 octobre 1745.)

乾隆帝の西洋趣味は、康熙帝のそれに比べれば、乾隆帝の趣味の方がはるかに芸術的であり、その態度もはるかに享楽的だったのである。

乾隆帝の絵画にたいする趣味は変らなかったかも知れない。しかし帝は油絵を嫌い画院出仕の宣教師にたいして水絵を要求し、肖像製作に関しては、中国風の全身像、正面像を要求されたばかりでなく、極度の密画と中国風の陰影とを強要されていた。そしてカスチリョーネにしろアッチレにしろ、乾隆帝の歓心を購わんがために、芸術的良心を枉げて御意に従ったのである。ゆえに彼等の描いた西洋画は、純然たる洋画ではない。中国画風と西洋画風との折衷画、むしろ両者の妥協画に他ならない。とにかく美術趣味ことに絵画はこの天子の道楽であり、言わば弱味であった。ゆえに宣教師はこの弱味につけ込んで帝の御機嫌を伺い、この弱点に乗じて禁教令の撤廃を実現しようと企てたのである。また迫害の生じた時には、御気に入りの画家カスチリョーネに託して、聖慮に訴えたのであった。

しからば乾隆帝は天主教と宣教師とをいかに評価されていたか、まずこの点について耶蘇会士そのものの意見を求めてみよう。

「康熙帝は北京では天主教にたいしてある程度の自由を認めておられます。しかし支那人も韃靼人もみな、基督教という名にたいする帝の反感をよく知っておりますし、いかなる宣教師も諸省に残存せしめず、またいかなる官吏も基督教徒たるを許さずという帝の決意をよく承知しております。それゆえ、支那で宗教書を読み、これを論じようと承諾するものはほとんどまれであります。天主教徒自体の間にも信仰が衰微いたしました。宣教師としてヨーロッパ人のことを御前で話しうるものが一人だに見つけうるかどうか疑わしいのです。我々が宣教師としてお話しようと試みる度ごとに、たえず皇帝の峻拒を被ったのであります。乾隆帝は宣教師を四名官吏に昇任させたから、十分彼等に報いられたと考え、基督教には些少の恩恵をも施そうとは考えられていないのです」(Le P. de Rochemonteix, Joseph Amiot, Pfister, Notices biographiques et bibliographiques. t. II. p. 671.)

かくの如く乾隆帝は天主教に悪感を懐かれていたから、帝の治世中、三回の大迫害が生じた時、刑部の禁教令に批准されたのである。そして帝はカスチリョーネから質問されると「朕は天主教を禁じ

たのではない。ただ、満洲旗人が信仰することだけを禁じたのである」と言って、お茶を濁された。しからば何故、乾隆帝は満洲旗人にのみ天主教への帰信を禁止したと言われたのか。御承知の通り、満洲旗人は清朝の股肱であるから、もしこの旗人が天主教によって精神的に茶毒を被るならば、一朝有事の際、清朝はその社稷を持続することが出来ない。ゆえに乾隆帝は満漢無差別を高唱しながら、実は満人の方に絶大の期待を繋いでいたことが解る。かえってこの勅言を通じて、天主教にたいする帝の反感をアリアリと認めることが出来るのである。

次に乾隆帝は、いかなる点に天主教の弊害を認めていられたのか。雍正帝は天主教の信者がたんに祖先教、孔子教から棄絶するばかりでなく、天主教を信ずるヨーロッパ君主の忠民になるべきことを恐れて、禁教を断行されたのである。この思想が乾隆帝の意中にも膠着していたことは言うまでもない。帝は登極匆々大赦令を発した。蘇努一家の如き天主教の罪囚を釈放した。恐らく康熙帝の模倣者であった帝は、天主教にたいしても祖考と同じく寛大な態度を取られ、事によってはこの異教を解禁しようと考えられていたかも知れない。しかし即位匆々第一、第二の迫害が生じた結果として、帝は雍正帝と同じ立場に帰らざるをえなかった。この点では康熙帝の模倣者であった乾隆帝も、雍正帝の立場を固執したのであった。そして第三の迫害は激烈でありその原因は深刻であった。宣教師をはじめ信徒は歓んで殉教の血を流し、天界の福楽を信じて、従容死についたのである。この現象がいたく乾隆帝の心を驚かした。それゆえ、帝はカスチリョーネに向かって「天主教徒は死を恐れないか」と、唐突な反問を提出されたのである。

宣教師は、人間の肉体こそ死滅するが霊魂は永久に生存し、信者の霊魂は神によって救済されて、天国に昇り無上無限の清福を得ると説く。それゆえ、篤信者は平然として死刑を被り、歓んで殉教の血を流すのである。一言すれば、国家が国法によって宗教を厳禁しても、信者は教法の要理を信じて

国法を犯すのである。したがって教法の前には政治が力を持たない。乾隆帝はまずこの点から、来世信仰の天主教に弊害を認められたのであった。この弊害を認めたものは、乾隆帝のみではない。古代ローマ皇帝は、もちろんのことである。東西を通じて来世宗教は、この至上権を発揮したのであった。かのモンテスキューも法理上の観点から、宗教にたいする国法の無力を痛嘆している。

「法官はいかほど極刑を課することが出来るにしても、この極刑が終った瞬間から、はじめて自分の幸福が始まると確信する人物にたいしては、国法はこの人を掣肘する道がない」

乾隆帝はモンテスキューと同じ認識に達していたから、天主教徒にたいしてその処置に窮されていたのである。ゆえに皇帝は絶対に禁教令を撤廃すべき意志を持たなかった。出来うべくんば禁令をますます強化して、天主教を根絶されたかったのである。しかし中国文明の科学的欠陥に掣肘されて、天子の意志も断行を欠いたのであった。とにかく乾隆帝は国策の観点から、また個人的趣味の立場から、宣教師に滞京を許して、彼等の中から能うかぎり西洋文明を吸収し、言わば搾取しようと決心されたのである。実際、康熙帝もこれほどの老獪さを持たなかった。

乾隆帝はブノワとの対話中、日本が鎖国禁教するにいたった事例を引き、「それは必ずしも日本人が宣教師を入用としなかったからではない。絶対に天主教を必要としなかったからである」と言われて微笑を洩らされた。この勅言は日本人の天主教観、宣教師観であるばかりでなく、実は乾隆帝自身の評価なのである。要するに日本においても中国においても、天主教とその宣教師とは無用の長物であった。ただ彼等の有する科学知識と芸能とが日本人にも中国人にも必要だったのである。この事情を前にして、しかもこの事情を理解せずして、あるいは天文暦数にあるいは絵画に出精して、天子の好感を購い、ついには禁教令の撤廃をみようと期待する宣教師の痴愚を冷笑されたであろう。

しからば宣教師は乾隆帝をいかに批判していたかを、彼等の記録について検証してみよう。

「乾隆帝はお独りでなんでも解る人であります。公明正大の精神に充ちておられますから、些細の不正すら行うことを許されません。柔和で近づきやすいので、冤罪を被った者が弁解するのを歓んで聴かれます。そして俊敏であり、厳格でありますから、圧制者を恥ずかしめて罰せられます。巧言令色がさほど帝の精神を支配するとは見受けられません。諸国の君朝と同じく清朝には廷臣がおります。しかし陛下の謙遜と稀代の美質とは、廷臣の慾得づくの讃辞と無味乾燥な礼讃とを相手にされません。要するに乾隆帝はもっとも高尚な、もっとも啓発された魂の持主であります」(Lettre du P. Cibot, au révérend P. D……A Pékin, le 3 novembre 1771.)

ある宣教師は乾隆帝を目して「知識慾に駆られた天才的君主」(Lettre d'un missionaire de Chine. A Pékin, année 1775.)と評し、他の宣教師も「乾隆帝は柔和な、慈悲深い性格の持主である」(Lettre du P. Parennin, au P. Duhalde. A Pékin, le 22 octobre 1736.)と言っている。そして宣教師は乾隆帝の厳格な政治態度については次の如き弁解を加えている。

「乾隆帝は堂々として立派な風采の君主であります。非常に優美であると同時に、尊敬の念を懐かせる容貌をお持ちであります。そしてこの皇帝が国民にたいして峻厳であるならば、それは性格の致す所ではなく、むしろ支那、韃靼の如き広大な両国をあくまで従属と忠誠の圏内に維持するためには峻厳政策を取らざるを得ないからだと信じます」(Lettre du P. Ventavon au P. de Brassaud. A Haitien, 15 septembre 1769.)

またある宣教師は乾隆帝の専制君主と学者との複合体に驚嘆して、左の一詩を賦した。

「乾隆帝は、万人の讃美する政道の
万機親裁に日夜、暇なし。
この帝王こそ世界第一の専制君主にして、
また支那第一の学者なれ」

乾隆帝は天文学者、美術工芸家としての宣教師には無上の恩待を賜わった。そして彼等のある者を

清朝の官吏に任用されたし、カスチリョーネ、シッケルバルトが古稀の齢に達した時には、これら外人画家にたいして、とくに盛大な祝宴を宮中に催され、多数の下賜品があった。しかし宣教師としての耶蘇会士にはきわめて冷淡であり、その態度を曖昧にされた。ことに諸省に潜伏する宣教師にたいしては、該地官憲に秘密命令を送って、彼等に厳刑を加えられた。実際、乾隆帝の胸裡では、宣教師と科学者、美術工芸家との間に区劃の白線が厳重に引かれて、皇帝は一点もこの区劃を混同されなかった。

乾隆帝は興漢思想を恐れて、いくたの文籍を禁止すると同時に、天下の名籍を拾集して「四庫全書」を編纂せしめられた。その時、宣教師の著述にかかる「天主実義」「教要序論」「軽世金書」「七克」を「四庫全書」の中に加えられたことは前述の通りである。天主教の教理が祖先教、孔子教の教理と牴触するとは、天主教反対論者の主張である。しかるに乾隆帝は前記の四書を勅撰総書の中に収められた。乾隆帝は天主教の要理が祖先教、孔子教の実義と一致すると判断されたのか。もしくは西洋趣味の皇帝は西洋知識を「四庫全書」の中に加えて、中国人の知識総和に多少の寄与を加えようと欲せられたのか。しかし天主教の教義をたんなる抽象知識と見なす時、もしくは一般道徳として判断すれば、孔子教も天主教も同じ抽象価値を持つことは言うをまたない。さりながらこの外来宗教が、伝道僧とくに耶蘇会士によって宣伝される時、天主教は政治的色彩を帯びだしたのである。本来ポルトガル政府が中国に耶蘇会の伝道団を送ったのも、宗教の教化力を利用して、政治的野望を遂げたかったからである。そして耶蘇会はポルトガルの政治力を利用して、遠東に宗勢を拡張しようと欲したのである。またルイ十四世が自国の耶蘇会士を中国に送ったのは、宗教の霊力に掩護されたポルトガルの政治力を撃破せんがためであった。かくの如く耶蘇会士の法身には元来、政治力が付き纏(まと)っていたから、彼等は中国の官民から不軌の野望を疑られて、天主教とその宣教師との排斥される原因とな

ったのである。そして乾隆時代には政府は白蓮教の政治的陰謀にたいして、極度の恐怖観念を懐いていたので、ついにこの観念を天主教そのものにまで拡大したのである。ことに広東碣石総鎮、陳昂の上表によって日本における天主教の騒動が清朝に伝わっていたし、インドにおけるポルトガルの植民政策が天主教を利用することによって成功したことも、清朝の風聴に達していた。

「乾隆帝も諸侯も天主教の善いことは認めております。彼等が、宣教師が公然伝道することに反対し、また宣教師の諸省に滞在することを許さないのは、たんに政治的理由によるのであります。また宣教師が宗教を口実として、他の意図を包蔵しているということを恐れているからであります。乾隆帝も諸侯もヨーロッパ人がインドを征討した事実にだいたい通じております。そして支那にも同様なことが起るまいかと懸念しているのです」(Lettre du P. Ventavon au P.de Brassaud. A Haitien, 15 septembre 1763.)

前述の通り雍正帝は天主教伝道事業の政治的影響を虞れて禁教令を公布されたのである。そして乾隆帝も、この政治的影響を虞れて禁教令を固執し、ただ科学者、美術工芸家としての宣教師を歓迎し、一見、天主教に寛柔な態度を示した。いわば宣教師を優遇して、禁教令を撤回するような態度を見せかけ、実は彼等の中から出来るかぎり、西洋の科学知識や芸術文化を搾取したのである。耶蘇会士の多数は乾隆帝の懐柔政策に魅せられて、皇帝の美徳を讃美していた。ただ一人、アミョーは乾隆帝の肚裏を看破して、左の評言を加えている。

「宣教師が支那に渡来して以来、乾隆帝ほど彼等の奉仕を利用した皇帝はない。しかし、この皇帝ほど彼等を虐待し、かつその伝道する天主教にたいして、もっとも怖しい禁令を発した皇帝は一人もなかったのである」(Lettre du P. Amiot au P. de la Tour. A Pékin, le 17 octobre 1745.)

かくて皇帝の西洋趣味に阿付して禁教令の撤回を実現しようとした宣教師の政策はむざんにも失敗に帰した。実際、耶蘇会の政治的陰謀もしくは世俗的情意は、日本、中国から彼等を駆逐させたばか

りでなく、ヨーロッパにおいては耶蘇会そのものを廃止の悲運に陥れたのである。おそらく霊俗分離の聖訓を干犯した僧侶の身から出た錆というべきであろう。乾隆帝の御製「盛京賦」の仏訳を読んで、「支那皇帝に捧ぐる歌」(Epître au Roi de la Chine) を作ったヴォルテールは「東洋諸民に告ぐ」(Avis à tous les Orientaux) という一篇の中で、耶蘇会士がヨーロッパ諸王の侵略主義に奉仕して、その傀儡をつとめることを指摘して、東洋諸民に警告を発している。この警告を待たずとも、日本と中国とはこの陰謀を看破して、夙に禁教したのであった。ゆえに遠東政府の聰明は賞讃に値するであろう。しかるに耶蘇会廃止後における北京管区の教権争い、耶蘇会と海外伝道会との紛争、ポルトガル僧団とフランス僧団との対立、ことに北堂資産の処分問題に関する耶蘇会の内紛にいたっては、これらの耶蘇会士が俗人以上に凡夫であったことを認明し、醜劣な図絵を繰りひろげるにすぎない。そして法体法心に巣食った慾心、ことにその政治的野心によって彼等の教団は廃止され、中国の伝道事業も廃滅に帰したのである。まして伝道僧が一朝〔修道会〕と会堂を失うや、たちまち「迷える羊」となり、生計の道に弱して遺産の分配に狂奔する醜態を見ては、第三者はただ呆れるよりほかはない。

要するに政治、宗教、自然科学の三力が絡み合っていた植民政策も、肝腎のカトリック教が一面においては東洋の固有教と衝突したし、他面においては、その伝道僧が世俗的、政治的陰謀を暴露した結果、中国では禁教され、本国においては〔修道会〕の解散となり、したがって在華伝道僧は脈絡を絶たれて自滅するにいたった。

参照文献

雍正帝御製円明園記
乾隆帝御製円明園後記

御製円明園「四十景詩」
唐岱沈源合作四十景図
円明園西洋楼二十景図
得勝図　　(以上東洋文庫所蔵)
石田幹之助「郎世寧伝攷略」(美術研究第十号所載)
国立北平図書館集「円明園專号」民国二二年五月一八月号
Recueil des lettres édifiantes et curieuses.
Lettre du Frère Attiret à M. d'Assault. (既出)
Lettre du P. Amiot au P. Allart. A Pékin, le 20 octobre 1752.
Lettre du P. de la Tour. A Pékin, le 17 octobre 1745.
Lettre du P. Ventavon au P. de Brassaul. A Haitien 15 septembre 1769.
Lettre du P. Benoit à M … le 4 novembre 1773.
Lettre du P. Benoit à Papillon d'Auteroche. A Pékin, le 16 novembre 1767.
Deuxième lettre du P. Benoit.
Troisième lettre du P. Benoit.
Lettre d'un missionnaire de Chine. A Pékin année 1775.
Lettre du P. Cibot au P. D … A Pékin, le 3 novembre 1771.
Lettre d'un missionnaire de la Chine. A Pékin, le 31 janvier 1778.
Delatour, Essais sur l'architecture des Chinois sur leurs jardins, leurs principes de médecine, leurs mœurs et usages. A Paris. 1803.
L'abbé Grosier, De la Chine ou Description générale de cet empire, redigée d'après les mémoires de la mission de Pékin. A Paris, 1813-1820. t. IV.
Feuillet de Couches, Les peintres européens en Chine et les peintres chinois (Extrait de la Revue contemporaine. Paris, 1856)
Pelliot, Les Conquêtes de l'Empereur de la Chine. (Toung-pao. 1920)
Huc, Le christianisme en Chine. t. IV.
Favier, Péking.
Pfister, Notices biographiques et bibliographiques.
A. Thomas, Histoire de la mission de Péking. Paris, 1923.

補注

三　正しく言えば長春園は円明園の東にあって、円明園の分支をなしていた。西洋建築、すなわち西洋楼は長春園にあった。しかし円明園の名で衆人の知るところとなったので、後人はこの両者を常に混同して同一のものと見なした。西洋宣教師はもっともそれが著しかった。方豪「中西交通史」第五冊六八ページ参照。

三　カスチリョーネは一六八八年にイタリアのミラノに生まれた。かれは、なみなみならない画才に恵まれていた上に、有能な師についてその才能を伸ばしたので、イタリアの画壇で高い地位を占めようと思えばできたであろうという。しかしかれの宗教生活にたいする強い願望は、画家として立つことよりも、助修士という低い地位でイエズス会内で働く道を選ばせた。かれは一七〇七年にイエズス会に入会し、一七一五年マカオに到着した。したがってかれは乾隆帝に重く用いられ、禁教下にあった布教の発展のために、しばしばこの皇帝への影響力を利用したけれども、かれの修道会内における位置は終始助修士(Frater, Frère)であるにすぎなかった。なお一度助修士として修練した者は、司祭に転ずることができないのが普通であるという。なおこのことはつぎのアッチレの場合にもあてはまるであろう。

三　カスチリョーネ署名の二図は全十六図のなかでもとくに絵画的にすぐれており、七図も書いているアウグスチノ会士チョヴァンニ・ダマシェーノ・サルスティ(安徳義)のものなどに較べるとはるかに光っているということである。

三　「万国輿図」という名の地図はマッテオ・リッチは作製したことはないと思われる。すなわち一五八四年

の雍慶版はリッチの世界地図のいわば第一版であるが、この名が何と記されていたかは全く分っておらず、「山海輿地全図」という名ではなかったという推測がなされているにすぎない。一六〇〇年の南京版はその翌年リッチが北京に入った時に万暦帝に献上した「万国図」にほかならないと考えられるが、この地図の実名が「山海輿地全図」というものであったことは疑いない。さてリッチの世界地図としてもっとも有名な一六〇二年の北京版が「坤輿万国全図」であることは、今日ヴァチカン文書館、京都大学図書館、宮城県立図書館等に蔵されている現物によって知ることができる。この最後のものは縦一メートル七九、横四メートル一四あり、六幅に分けられ、折りたたみできるようになっている。

三七 この地図が「皇朝内外壱統輿図」という名であったかどうか分らない。一九二五年北京の故宮博物院文献館で発見された百四枚の銅版からなる十三排（段）の地図がこれであることは間違いない。普通には「乾隆内府銅版地図」とか「乾隆十三排地図」とかいう名で呼ばれており、その作業を監督し、よく完成したものがブノワであり、ダ・ローシャ（傅作霖）、デスピニャ（高慎思）らがこれを助けたといわれ、絵を描いたのは主としてゴービル（宋君栄）であったとされている。完成は一七六一年ということである。パリの国立図書館にブノワが製版商とむすんだ契約書が残っているので、パリで銅版がつくられたという説もあるが、ブノワがみずから研究して成功したのち、職人を招いて北京で製作したという説も有力である。わたしは後者の説をとる。「皇輿全覧図」に比べての優点は、中央アジア方面がずっと正確になっていることで、これは乾隆の大征服の結果によるものであり、ブノワ、デスピニャらが実地に測地したものに拠っているのである。またロシアと中国との国境地方にも重点が置かれているので、貴重な文献と言える。

三八 Panzi, Pansi はその名からして察せられるように、フランス人ではなくてイタリア人であり、助修士である。ただかれはポルトガル・ミッションでなく、フランス・ミッションに加わっていたのである。このことは後藤博士の文中に見えているが、念のために記しておく。なお潘廷璋はまた潘若瑟とも書く。

三九 修道会（Ordo, Religio, Congregatio, Societas, Instituto）を後藤博士はすべて僧団とか教団とか称しておられるが、日本語で何々教団という場合には仏教、神道、新興宗教などの分派あるいは独立した団体を示すことが多く、ローマ教皇を頭にいただくカトリック内部における修道団体を表示するものとしては適

当でないので、現在日本カトリック教会内で使用されている修道会という言葉に改めた。修道会は一定の戒律に則って公けの三誓願（清貧、貞潔、従順）を立てて宗教生活を営む団体、修道団体を指し、大別して観想生活を徹底させるものと、布教・救霊・教育・出版・乳幼児の保護、病人看護などの活動を主とするもののふたつがある。それぞれ総会長（Generalis, General, Général）があり、各会とも独自の衣服を着用する。修道の三誓願を立てて修道院に共住する男子が修道士、女子が修道女である。修道司祭は Regularis と呼ばれ、教区づき司祭である Secularis に対する。

四〇 Grand Vicaire という原語であるが、これには司教代理という意味と助任司祭という意味がある。後藤博士は後者の意味にとられたのであろうが、南京の司教が北京の助任司祭という低い位地をとることは考えられないので、以下後藤博士が副司祭としておられるところは、誤解を避けるために、すべて司教代理と訂正した。

四一 後藤博士が「海外伝道会」と訳しておられるものは、実は Sacra Congregatio de Propaganda Fide のことで、正しくは「布教聖省」と訳すべきものである。Sacra Congregatio すなわち聖省はローマ教皇庁内に現在では十二あり、教皇の委嘱で一定の所管事項を主宰する会議的中央官庁であり、カトリック教会の各省にあたるものである。布教聖省の発足は一六二二年に教皇グレゴリウス十五世が教皇令をもって、この聖省に布教事業の一切を管理させることを命じたことにある。これはポルトガルの布教保護権を破り、イエズス会の中国、日本布教独占をおさえることに比重を置いた処置であったので、当然の結果としてこの聖省とイエズス会あるいはポルトガルとの対立抗争が絶えなかった。なおこの Congregatio のことを「海外伝道会」と訳すと例の「パリ外国宣教会」（La Société des Missions Etrangères de Paris）と間違いやすいから、この点でも「布教聖省」とした方がよいであろう。

東洋文庫 144

中国思想のフランス西漸 1

後藤末雄
矢沢利彦 校訂

平凡社

目次

序説

一　中国とヨーロッパとの接触……三

二　中国とフランスとの接触……一七

一　思想的反映……二七

一　デカルト……二七

二　パスカル……二八

三　ピエール・ベール……三一

四　フォントネル……三三

二　美術的文学的反映……三四

一　スカーロン……三六

二　モリエール……三六

三　ラ・フォンテーヌ……三七

第一篇　フランス耶蘇会士の清朝における活動とその学術的業績

一　ローマ教皇のフランス耶蘇会士中国差遣……四二

二　ルイ十四世のフランス耶蘇会士中国差遣……一五〇

三　康熙帝の西欧科学研究と「皇輿全覧図」の測成……六四

四　康熙帝と天主教の公許……七四

五　「儀礼問題」と康熙帝の態度……九四

六　雍正帝の禁教事情とその真因……一一九

七　乾隆帝と西洋文化……一四四

一　乾隆帝と天主教……一四四

一　第一次迫害……一四四

二　第二次迫害……一四八

三　第三次迫害……一五二

二　乾隆帝の西洋趣味……一六一

一　円明園内に洋館と噴水の構築……一六一
二　模型芝居の献上と器械人形の製作……一七〇
三　フランス耶蘇会士アッチレの絵画奉仕と官祿拝辞……一七三
四　「得勝図」の製作とその西送……一八三
五　「坤輿全図」の作製……一八六
六　「得勝図」の試刷延期……一八九
七　「皇朝中外壱統輿図」の作製……一九一
八　パンシの尊像写生……一九三
九　望遠鏡の説明と排気機の御前実験……二〇〇
十　耶蘇会の解散と北京の耶蘇会士……二〇七

第二篇　フランス耶蘇会士の自国に紹介せる中国の精神文明

一　フランス耶蘇会士の中国研究書目と東洋旅行家の中国記事……二二四
一　ル・コント師の著書……二二五
二　ブーヴェ師の著書……二三七

三　ヴィドルー師の撰著……二四一
四　ジェルビョン師の撰著……二四四
五　レジス師の訳書……二四五
六　プレマール師の編著……二四六
七　ド・マイヤ師の訳書……二五一
八　ゴビール師の著書……二五四
九　中国に関する三大名著の公刊……二五八
二　孔子教の訳書とその価値……二七九
三　フランス耶蘇会士の孔子教にたいする評価……二九二
一　孔子教の実践性……二九二
二　孔子哲学の最古性……二九三
三　孔子哲学と古代哲学との比較……二九四
四　孔子教と基督教との合致……二九五
四　中国の家族制度と徳治主義……二九八
五　中国の政治制度……三〇三

六　フランス耶蘇会士の中国政治制度にたいする鑑賞……三六
七　中国における自然科学の発達とその停滞原因……三三
解　説（島田謹二）……三三

中国思想のフランス西漸　1

後藤末雄
矢沢利彦校訂